
流星のロックマン Enemies return

千円ガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン Enemies return

【Nコード】

N5044H

【作者名】

千円ガム

【あらすじ】

流星のロックマン呪われた設計図第1章・ディーラーの戦いから後スバル達は平穏な日々を送っていた。しかしそんな平和な学校生活に突如復活したグレイブ・ジョーカーが襲う。そして謎の組織が出現する。そのメンバーは様々な思いを胸に抱き共通の目的・自分の目的のためスバル達に襲い掛かる！！そしてスバルは新しい力を手に入れる。そして宇宙では大きな変化が起ころうとしていた。スバル達と謎の組織の戦い！！

プロローグ「支配計画始動」

プロローグ「支配計画始動」

とある辺境の地に建つ古びた屋敷・・・

人々はこの地で何が行われているかなどは知る由も無かった。

しかしここではある恐ろしい計画が進行していた。

「・・・これはまだ実験段階で完全には再生できていないがこのまま行けばこれは完成する」

何かの組織のボスらしい男がいった。

「そうすれば貴方の計画も成るでしょう・・・」

「ああ・・・だが私の計画に邪魔な者がいる・・・」

「邪魔な者・・・というと？」

今度は女が言った。

「ロックマンだ・・・」

「ロックマン・・・というと世界を三度も救ったというヒーローですか？・・・しかしあのような少年に我らの計画を邪魔できるのですか？」

「確かにあの小僧はなにか特別な力を持つわけでも無い・・・だが

その近くにいるウォーロックというやつが厄介だ・・・それにキズナの力とやらも気になる・・・」

「キズナ？そんなものまやかしてしよう。弱いものが集まり強くなつたと勘違いするだけ・・・」

「ならば我らはどうしてこのように集まつたというのだね？」

「我らはキズナなどという形の無いもののためではなく偉大な計画のために集まつたのです。」

彼らは口々に言う

「その通りだ・・・所詮キズナなどというのはそういうものだ・・・だが我らは時としては仲間を切り捨てることもある。そう・・・我らは他人を利用し合うだけだ。」

「私は貴方の思想に従うまでです・・・」

「・・・・・・」

そしてそのころスバルは新たな戦いが迫っていることなど知らず平穏な日々を送っていた。

第1話「再襲」

そのころスバルは学校にいた。

いつもどおりの授業をこなしくごく普通な日々を送っていた。

――しかしそんな日々も長くは続かなかった――

「よし。今日はバトルカードについて勉強するぞ。みんなハンターV Gを出して」

育田先生がいった

「はい」

それに全員が元気に答えた。

スバルは皆と同じようにハンターV Gを出して授業を受ける準備をした。

そのハンターV Gは僅かにノイズの反応を捉えていたがスバルたちは気が付かなかった。

「バトルカードの授業か・・・まあお前には必要ないだろうな。」

ウォーロックがスバルのハンターV Gの中で言った。

「そんなこと無いよウォーロック。確かに実戦でいつも使ってるけどそれだけじゃわからないこともあるからね」

そして授業が始まった。

内容は練習用に作られたウイルスのメットリオをデリートすることだった。

「ああ！しまったカード間違えた！」

「何やってるんだゴン太！そんなこと実戦でやったらやられちまうぞ！」

「ハハハ！！相変わらずじゃねえか」

よく失敗をする二人をウォーロックがからかった。

「なんだとお！」

それにオックスが反応して言い争う。

「ははは・・・やめなよ二人とも・・・」

しかしその教室の外には見知らぬ男が立っていた。

「フッフ・・・平和を楽しんで入れるのもこれまでだ。星河スバル・・・いや・・・ロックマン・・・行って来るがいい・・・」

その男はハンターV Gから何かを出して去っていった。

「さてと・・・これでウイルスは全部か・・・」

「いやー最近腕が鈍ってきたような気がするぜ。それにお前もたまには電波変換して戦えよ。もうみんなお前がロックマンだってことは知ってるんだから」

「嫌だよ・・・いくらみんな知ってるからって目立つしさ・・・あれ？・・・何かハンターV Gがノイズに反応してる？」

「!?!? 気をつけるスバル！何かいるぞ！」

するとブラックボードの前に1人の巨大な男が現れた。

「お・・・お前は!?!?」

ウォーロックは驚いたように言った。

「ジョ・・・ジョーカー!?!?」

スバルも驚いていた。

「・・・」

「何でお前がこんなところにいるんだ！お前は自爆して消えたはずじゃ・・・来るぞ！避ける！」

グレイブジョーカーはグレイブメテオレーザーを放ったが幸い誰にもあたらなかった。

「みんな！早く非難するんだ！！」

「みんなが危ない！僕がとめなきゃ！・・・トランスコード 003！シューティングスター ロックマン！」

そして電波変換を完了させグレイブジョーカーと対峙した。

「何でお前がここにいる？何が目的だ・・・答えるつもりは無いらしいな・・・いくぞスバル！」

「バトルカード！エドギリブレード！」

スバルはエドギリブレードで切りかかったがグレイブジョーカーはそれを受け止めサウザンドキックを当てそこをデストロイミサイルで追撃した。」

そしてそこをさらに接近して殴りかかった。

「くっ・・・バリア！」

スバルはその攻撃をバリアで防ぎ再びエドギリブレードで切りかかった。

「ズバっ！！！！！」

その攻撃はヒットしグレイブジョーカーは動かなくなった。

「どうしたんだ？この程度で倒せたとは思えないけど・・・」

「やつの様子がおかしいぞ？」

確かにグレイブジョーカーの体は次第に崩れ消滅した。

「どういうことだろう・・・とりあえず病院にいるシドウさんに言ってみるか」

そのころ

「なるほど・・・やはり現段階ではまだ長時間の戦闘は不可能か・・・
まあデータが取れただけよしとするか。これだけでは我らの存在を感じられることもあるまい」

第2話「蘇った敵？」

スバルは走っていた。

学校はグレイブジョーカーの現れた騒ぎでその後すぐに生徒は家に帰ることになった。

「暁さんのいる病院へいつてこのことを報告しなくちゃ」

「ああ・・・これはただごとじゃなさそうだぜ」

そして病院に到着した。

「・・・なるほど。そういうことがあったわけか・・・しかしどういうことだ？・・・あいつは何か言っていたのか？」

「いえ・・・何も言わずに消えてしまいました」

「そうか・・・だとしたら俺にはわからないな・・・」

「そうですか・・・」

その時シドウのハンターV Gに通信が入りWAXA日本支部の長官がモニターに映し出された。

「暁。そしてスバル君もいるようだな・・・だとしたら話は聞いているかも知れないがグレイブジョーカーが現れた」

「はい・・・それでやつの目的はわかりましたか？」

「いや・・・その件に関してだがどうやら再び現れたのはやつだけではないようだ。各地から以前事件を起こした電波体やウィザードが現れたという報告が来ている」

シドウは少し考えてから言った

「では・・・この現象は・・・裏で誰かが糸を引いている可能性があるということですね？」

長官は頷いていった。

「ああ・・・今のところ何も手がかりがつかめてはいないが唯一わかつているのは現れた電波体がすべてすぐに消えてしまったことだ」

「それは・・・その電波体が本物なのか調べる必要がありますそうですね」

「そうだ・・・ところで暁。お前の容態はどうだ？」

「悪くはないですが・・・まだ無理はできません」

長官はしばらく間を置いて言った。

「そうか・・・仕方あるまい・・・」

すると急にスバルが話に口を挟んだ。

「あの・・・」

「なんだねスバル君」

「僕にも何か手伝えることはありませんか？」

「・・・気持ちはいれしいが今のところまだ事件もおきていないしサテラポリスだけで十分だ。ロックマンの力を借りるまでも無いだろう。それじゃ暁・・・大事にな」

そう言って通信は切れた。

「どうやらまだヒーロー出る幕じゃないみたいだな」

「あーあ・・・まだ暴れたりねえぜ」

「相変わらずですねウォーロック」

アシッドが口を挟んだ。

「んだとお！お前こそその性格変わってねえな！」

「やめなよウォーロック。まったく・・・いつも喧嘩ばかりするんだから・・・それじゃ暁さん。僕はもう行きます」

「ああ。じゃあな」

・・・そのころ古びた屋敷の地下では・・・

「そうかまだ長時間は闘うことができないか」

そこには組織の親玉である男が1人と若い男女が3人いた。

「はっ・・・ですがまだ改良の余地があります。しかし・・・エネルギーが足りません・・・いったいどうすれば」

「心配いらぬ・・・エネルギーについては手を打てる」

「手・・・とは？」

「クリムゾンだ・・・ディーラーという組織はそれをメテオGという星を操るのにつかったそうだがそれ以外にも使い道はある」

そしてこの組織はスバルたちの知らないところで活動を続けるのだ
った

第3話「宇宙の異変」

「クリムゾンを手に入れるにはウィザードを暴走させるのが一番だ・
・幸い我らの元にはノイズドカードがある。これでクリムゾンを
発生させる」

「はっ！」

そう言返事をし部下の三人は出発した。

「これでウィザードを暴走させればやつらは我々を本格的に探し始
めるだろう。だがやつらが我らを見つけるのが先か・・それとも
世界が我らの手に落ちるのが先か・・賭け事は好きではないが・
・これはこれで面白いかも知れぬな」

そして学校では・・・

「えーと・・・今日は新しい先生を紹介するぞ！」

この一言に教室はざわついた。

少し前にジャックとクインティアが学校にやってきたがすぐに居な
くなくなってしまったため何故だかスバルには新しい先生が来るとい
うことが新鮮に感じられた。

そして新しい先生が入ってきた。

新しい先生は若い男性だった。

「この先生は 細嶋陸斗^{ほそじま りくと}さん。今日から私に代わってこの電波社会について教えてくれるぞ」

「よろしくお願いします。今日から一緒に学んで行きましょう!」

「よろしくお願いします!」

全員で返事の挨拶をした。

「電波社会について教えてくれるのか・・・でも新しい先生っていつのはクインティア先生がいなくなってから来てなかったからな」

とスバルは思ったことを口に出した。

そんな風にスバルたちの環境に少し変化があったころ宇宙では大きな異変が起ころうとしていた。

「ここか・・・シリウス様が遠征に向かった後に通信が途絶えたのは・・・」

そこはF M星の近く。シリウスの襲撃があったところでありまだブラックホールサーバーが虚しく残っていた。

そこに1人の電波体がいた。

「このブラックホールサーバーに残っているデータを見れば・・・」

そしてデータの解析が終わった。

「!?!?・・・シリウス様が・・・デリートされただど・・・いつ

たい誰に！・・・ロックマン？・・・しかしこれはまずい・・・
本拠地に戻らねば！」

しかしその姿を捉えたものがいた。

ケフェウスだ。

「あれは？・・・いったい何をしていたのだろう？」

それから数時間後・・・

ブラックホールサーバー付近にどこかともなく戦艦のようなものが
あらわれた。

「シリウス様をデリートしたロックマンというやつを見つけるには
まず目標だったFM星を調べるべきだろう・・・FM星に進行する
ぞ！」

その戦艦には多くの電波体に乗っていた。

しかしその戦艦がFM星に近づいたとき無数のFM星人が現れた。

その中にケフェウスの姿もあった。

「怪しいと思い待ち構えていたらやはり・・・何者だ？シリウスと
関係のあるものか？」

「私の名はベータ・リシウ・・・貴様は・・・FM星の王だな？ロ
ックマンというものを知らぬか？わが主シリウス様をデリートした
者だ！」

「やはりそうであったか・・・だがそのような者に我がブラザーをあわせるわけには行かない！」

ここブラックホールサーバー付近でFM星とシリウスの部下の両軍が激突したのである

第4話「激戦！シリウス無敵艦」

「総員！全力であの戦艦を迎撃せよ！」

「限界まで近づいてから出撃せよ！わが艦は援護射撃を行う！」

リシウの戦艦が少しFM星に近づいたところでシリウス軍の電波体が出撃しFM星の電波体と戦闘を始めた。

「主砲を撃て！」

この指令と同時に戦艦はエネルギーを溜めてから一気にシリウスのサテライトブレイザーのような主砲を撃った。

この攻撃により多くのFM星人が宇宙の藻屑と化した。

「くっ・・・被害状況は？」

「はっ！現在我が軍の四分の一の部隊が壊滅状態です！」

兵士が答えた。

ケフェウスは驚いていた。

「そんなにか！？敵はどれほどいるのだ？」

そして兵士は絶望的に言った。

「おそらく我が軍の倍・・・それだけでなくあれだけの規模の戦艦ならば現在展開している敵軍と同じぐらいの数が乗っついて

もおかしくないとのこと……」

「それほどの大軍か……シリウスの力があればそれくらい作り出せたのかも知れぬな……だがやつはまさか自分がデリートされるとは思わなかったのだろう……」

「いかがいたしましょう？地球に救援を求めますか？」

「いや……そう何度もブラザーに迷惑をかけたくは無い……余はジェミニにけしかけられたときも……シリウスの時もブラザーを危険な目に合わせた……これ以上は……」

だが戦況はFM星にとって思わしくないまま戦いが続いた。

そんな中地球ではノイズドカードが各地で使われワイザードが暴走を始めていた。

そのことはスバルのハンターVGにも知らせられた。

「各地でワイザードが暴走……でもディーラーはもう無いはず……」

「おそらくこの事件をおこしたのはディーラーじゃねえな……少し前にあったジョーカーのやろうとかが再び現れたがそれと関係があるかもしれない……暁が言うように裏で糸を引いているやつがいるだろうな……」

「確かに……僕にも手伝って欲しいとどいているからまずは暴走したワイザードがいなか調べよう！」

そして・・・

「ロックバスター！」

「ギャアアア！！！」

ノイズトウィザードがデリートされた。

「これでコダマタウンにはもう暴走ウィザードはいないみたいだね」

「ああ・・・だが・・・いつたい誰が」

スバルがコダマタウンの暴走ウィザードの事件を解決した後ハンターV Gには各地でも暴走ウィザードを止めることができたと報告が来ていた。

しかしその時スバルはあることに気が付いた。

「クリムゾンが・・・無い？」

「何！？こんなにウィザードが暴走したつてのに無いだと！」

これはおそらく誰かがクリムゾンを集めたのだろつという結論になった。

「だけど・・・いつたい誰が？・・・メテオGが無ければ悪用はできないんじゃない？」

その後サテラポリスが裏ではたらいっている組織が無いかと調べはじめたのである。

第5話「奮戦するケフェウス」

「僕たちも何かできないかな・・・」

「なら裏で糸引いてるっていう組織を探そうぜ。見つけ出してぶつとばすんだ!」

そのころ例の古ぼけた屋敷の地下で

「今日は我々は新たなメンバーをスカウトした」

「俺の名前は??? 宜しく頼むぜ ヒヤハハハハ!」

「ああ・・・(何だコイツは?)」

「(狂っている・・・)」

「(危ないやつを入れたもんだな・・・)」

「皆こいつがおかしなやつだと思うだろうがコイツほど残酷なやつはなかなかいない。私はそこを見込んでスカウトしたのだよ」

「貴方が自らがスカウトしたのならそれはさぞかしお強いのですよね・・・」

「そこだ・・・今回はこいつにロックマンの攻撃を命じる・・・いつてこい!だがくれぐれも我らの正体がばれることの無いようになそれと?2 お前も少し協力しろ・・・あの小僧のいる小学校に接触するからな」

そして新しい先生が来てからはじめての電波社会の授業が行われた。
新しい先生・・・細嶋陸斗による授業だ。

「ではハンターV Gを出して！」

全員がハンターV Gを出したのを確認するとバトルカードの講座を
始めしばらくして最後にこういった。

「バトルカードというものは時には危険なものにもなる。扱いには
気をつけるんだ。それが人を傷つけることにもなるかもしれない・
・」

そう締めくくって授業を終えた。

この先生についてはスバルも少し興味を抱いたが今は二度の事件の
ことで頭がいっぱいでそれどころではなく授業でもいつも何か考え
事をしているような目をしていた。

「スバルくん！貴方最近授業でばうつとしてない？」

生徒会長であり学級委員長である城金ルナがきびしく言った。

「え？そうかな・・・」

「そうですよスバル君。何か悩み事でもあるんじゃないですか？」

最小院キザマロが言った。

「別にそんなこと無いよ」

「いやお前なんかへんじゃねえか？」

今度は牛島ゴン太が聞いた。

「大丈夫だつて」

「・・・スバル君・・・貴方はいつも悩んでいることを自分だけで解決しようとするわね？」

この一言に会話は静まり返りしばらくの沈黙が続いた。

しかしその沈黙を破りスバルが言った。

「でも・・・僕はいつもみんなを危険な目に合わせている・・・」

「いいスバル君。貴方はいつも1人で悩みを抱えているけど貴方は1人じゃない。仲間・・・ブラザーがいるのよ！たしかにブラザーだから一緒に危険な目にも合うかも知れない・・・だけど友達を助けたいと思えばそんなことしたいしたことじゃないのよ！」

「・・・ありがとういいんちょう。じつは・・・」

こうして一切の事情を話したスバルはルナ達とともに再びチームルナルナ団として事件を解決することにした。

レゾン 謎の組織の正体を暴く。

そのころ宇宙では未だに戦いが続いていた。

「戦況は悪化するばかりか・・・これなれば余が自ら行くしかあるまい・・・」

「ケフェウス様！？お待ちください！！！」

しかしケフェウスは一人で敵に向かっていった。

その様子を見たFM星軍の士官が言った。

「あれは・・・ケフェウス様！？血迷ったか・・・王自らが敵に突撃するなど・・・」

ケフェウスは威勢高く言った。

「皆・・・今こそ我が勇気をみせよう！私は命を懸けて敵を撃退する！ついてまいれ！！」

この言葉にFM星の軍はケフェウスに遅れまいと敵中を突き進んだ。

そしてケフェウスは標的である敵戦艦を見つけ攻撃を始めた。

これにより敵戦艦は被弾し撤退を始めた。

「ばかな・・・くつ主砲を撃てるか！？」

シリウス軍の兵士が答えた。

「ダメです！主砲のエネルギー炉が破壊されました！」

「くっ！弾幕を張れ！副砲で近づく敵を撃て！」

ケフェウスは再び敵艦に接近したが運悪く敵の副砲が直撃した。

「ぐっ！！！」

「ケフェウス様！！！」

このケフェウスの必死の特攻によりシリウス軍はブラックホールサーバーまで退いたがケフェウス自身も重傷を負ってしまった。

第6話「急襲！冷たい戦い！」

「王の容態はどうか・・・」

医師が答えた。

「あまり良くはありません。命に別状はありませんがしばらくは動くこともままならないでしょう。」

F M星は戦いに勝ったにも関わらず暗い雰囲気にも包まれていた。

誰もが王の容態を案じまたシリウスの軍が攻めてこないかと恐れていた。

そしてF M星の民が王のいる宮廷に押し寄せていた。

すると大勢の民の前に1人の電波体が姿を現した。

それは動けないはずのケフェウスだった。

多くの医師に介護されてやっと歩ける状態だ。

「F M星の民よ・・・心配をかけたな・・・私は大丈夫だ・・・シリウス軍がまた攻めてきたときは・・・必ず・・・守ってみせる・・・」

ケフェウスは弱弱しくも威厳に満ちた声で演説を行った。

これによりF M星の民は安心しシリウスの再襲に備えた。

「無理をされましたな・・・ケフェウス様」

「国民を・・・心配させたままでおくわけには・・・いかないだろう　ゴホッ！」

ケフェウスは咳きをしながら話した。

「貴方だけの御身体ではありませんぬ・・・ぐれぐれも養生にお尽くしくだされ・・・」

一方のシリウス軍では。

「ぬかった・・・まさかFM王があれほどのことをするとは・・・我が軍の兵士も動揺している・・・ここは一度シリウスグランドにもどるか・・・あれも持ち出すことになるかもしれないぬ・・・」

こうしてシリウス軍は一部の戦力をブラックホールサーバーに残して本拠地へ一時退き帰した。

そのころ地球ではこのFM星の危機を知らないスバルたちが謎の組織の正体を暴くというレゾンの下で活動していた。

「それにしても・・・事件は起こらねえかあ」

ゴン太が言った。

「そう頻繁に起こってほしくも無いけどね・・・」

スバルは微笑した。

たが事件が起こらないことには内心ほっとしていた。

少なくとも・・・友達の身に危険が起こらなければ・・・

そしてその日もいつも通り学校の陸斗の授業が始まった。

「それじゃあ今日はリアルウェーブについて・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつもどおり先生の話聞いてノートに執ったりしていた。

「それで・・・」

「ドコーーーン！！！！」

とてつもなく大きな音がコダマ小学校に日響いた。

「な・・・なんだ！？」

その音は上から聞こえてきたのでスバルは屋上に急いだ。

するとそこにはイエティ・ブリザードとダイヤ・アイスバーンの姿があった。

屋上は完全に凍っていた。

「イエティ・ブリザード！？それにダイヤアイスバーンも・・・いったい何をしに来たんだ！！」

「・・・・・・・・」

「やっぱり何もいわねえか・・・しかたねえ！」

そしてスバルと敵との戦いが始まった。

そこにオックスファイアに変身したゴン太も到着し加勢した。

スバルはオックスにダイヤ・アイスバーンの相手を任せイエティ・ブリザードの相手に向かった。

その屋上には2人の男が隠れてこの戦いの様子を監視していた。

第7話「突入！ブラックホールサーバー」

コダマ小学校屋上ではロックマンがイエティブリザードと。

オックス・ファイアがダイヤ・アイスバーンと戦っていた。

「ロックバスター！」

ロックマンはロックバスターを連射するがイエティ・ブリザードはそれを避けロックマンに隙ができようものなら接近して殴りかかった。

「く・・・以前より強くなっている・・・」

イエティ・ブリザードは次にナダレダイコで攻撃してきた。

ヒットすればひとたまりも無い。

しかしロックマンはそれをオーラで防ぎ接近してソードファイターで切りかかった。

「くらえ！！！」

攻撃はヒットした。

だがその瞬間ロックマンの張ったオーラが消えていた。

なんとイエティ・ブリザードは攻撃をほとんど避け一回も直撃していなかった。

そしてそこをロックマンに殴りかかったのである。

「オーラを破られたな・・・どうする？ 奴には攻撃が当たらないぞ？」

「どうすれば・・・」

しかし考えているうちにもイエティ・ブリザードは容赦なくロックマンに攻撃をしてくる。

ロックマンの体力はかなり減らされていた。

一方のイエティ・ブリザードにはまだ大きなダメージを与えられていなかった。

「そうだ・・・これなら！」

ロックマンはホイッスルを使った。

すばやい敵の動きを一瞬止めたところにプラズマガンを撃った。

その攻撃によりマヒしたイエティブリザードにロックマンが追撃をかけた。

「ムサマサブレード！！！」

ムラマサブレードはロックマンのダメージだけ威力を増しイエティブリザードはデリートされた。

またそのころ宇宙のブラックホールサーバーに残ったシリウス軍はFM星の王が負傷したことを知り小数で攻撃を仕掛けていた。

残留軍の指揮をしているシリウス軍の士官が言った。

「いいか！敵の王は負傷し敵は士気が下がっているはずだ！一気に攻め崩すのだ！」

しかしFM星の士気はケフェウスの演説により逆に高くなっていた。

FM星のコスモウエーブ付近を監視していた兵士がシリウス軍の動きを捉え敵のシリウス軍を待ち受けた。

結果はFM星軍の大勝だった。

そして捕虜したシリウス軍の兵士からリシウが一度本拠地に戻っていることを聞き出したFM星軍はブラックホールサーバーを今のうちに占領しようと考えた。

そしてすぐに大軍がブラックホールサーバー内に送り込まれた。

ブラックホールサーバーはいろいろな惑星などがあった。

すべてがシリウスがコレクションにしようとしたものだった。

FM星軍はそこに残っていたわずかな敵を掃討しブラックホールサーバーを占領する作戦を開始した。

第8話「爆走撃　ダイヤ・アイスバーン！」

スバルはイエティ・ブリザードをデリートした。

そのころオックス・ファイアはダイヤ・アイスバーンと闘っていた。

「くそっ・・・相手は水属性・・・相性が悪いぜ・・・」

オックスがゴン太を励ましていった。

「弱音を吐くな！あんな氷俺達の炎で溶かしてやれ！！」

「こっちは終わったよオックス・ファイア！」

「おおロッキーマン！よしあいつをやっつけようぜ」

だがその屋上に隠れていた一人の男がひっそりと言った。

「チッ・・・片方がやられたか・・・だがお楽しみはこれからだぜ
え・・・」

するとその男はハンターV Gを操作した。

どうやらハンターV Gで電波体を操っているようだった。

そしてその男はそれに何かを組み込んだようだった。

その後ダイヤ・アイスバーンの様子が少し変化した。

今まで標的を捉え攻撃していたが急に所構わず攻撃を始めた。

「な・・・なんだ？」

「暴走・・・した？」

「とにかく止めなくちゃここが壊されちまいそうだぜ！オックスタツクル！」

だがダイヤ・アイスバーンが振り回したBアイスハンマーが直撃し巨体のオックス・ファイアが吹っ飛ばされた。

屋上はぼろぼろになりまたふぶきが吹き荒れ凍っている。

「厄介だな・・・暴走してやがるうえにあの威力は・・・」

ウォーロックが言った。

「それなら作戦をたてよう！」

そしてスバルはとっさに思いついた作戦をゴン太に伝えた。

スバルは一気にダイヤ・アイスバーンに駆け寄った。

「バトルカード！ソード！」

ダイヤ・アイスバーンはBアイスハンマーを振りかざしたがスバルはその瞬間に凍っている床に滑り込み切りかった。

しかしお構い無しにダイヤ・アイスバーンはBアイスハンマーで攻

撃した。

が・・・それよりもスバルたちが先に動いた。
スバルは攻撃を止め敵を攻撃を避け違うバトルカードを使った。

「草むらステージ！」

そしてフィールドが草むらに変わった。

「オックスフレイム！！！」

背後に回りこんでいたオックスファイアの攻撃が直撃しダイヤ・アイスバーンもデリートされた。

「・・・2体ともデリートされたか・・・今回はたまたま失敗した
だけだ・・・」

そっぴい残して男は去っていった。

第9話「抵抗するブラックホールサーバー」

F M星軍はブラックホールサーバーに突入しわずかに残っている敵を掃討しようとした。

だが残っていたシリウス軍は中であつた砂漠の惑星に逃れF M星軍を奇襲する機会をうかがっていたためF M星側もそれを放置するわけにはいかなかった。

そこでシリウス軍残留部隊を討伐するためにF M星軍も部隊を送った。

「やけに静かだ・・・敵陣があるとは思えぬ・・・」

しかしそれでも進軍したF M星軍だったがそのF M星軍は進むうちに数が減っていることに気が付いた。

「な・・・なんだ？何故数が・・・」

「ぐわあ！ー！」

するとまたF M星兵士が1人へつた。

「ま・・・まさか！落とし穴か！？」

F M星の兵士はシリウス軍の落とし穴によって減らされていた。

見えない地下の相手にF M星の兵士は恐れ動けなくなっていた。

「く・・・ゲリラ戦を仕掛けてくるとは・・・」

その時FM星軍の部隊の中心が地下からの奇襲を受けた。

それにより兵士は逃げ惑い分断された。

そして奇襲を仕掛けたシリウス軍の戦闘には・・・

「ハハハ！見たか！わしの戦法に掛かれば貴様らなど相手ではないわ！」

「あ・・・あれは!？」

そこにはオリガ・ジェネラルの姿があった。

オリガ・ジェネラルはシリウス軍の残留部隊の部隊長になっていた。

散り散りになったFM星軍は地下から各個撃破され本隊に逃げ戻った兵士は多くは無かった。

そのころの例の古びた屋敷の地下では

「この者は失敗いたしました・・・貴方はこの男の器量を見誤ったのでは・・・」

「何を言う・・・この者は1人で2体もの電波体を同時に操った。それでロッキーマンらと互角に戦えるのだ・・・」

「はあ・・・そうでございますか・・・（我が主はこの者を買いかぶりすぎているのでは・・・）」

そしてスバルたちは未だ敵の手がかりもつかめないままの日々を送っていた。

スバルの家

「はぁ・・・結局今日も成果はなしか・・・」

その時そばにいた彼の父・・・星川大吾が語りかけた。

「スバル・・・なんだかしらないがうまくいってないようだな・・・だがそんなときこそあきらめちゃいけない。あきらめないで続けていればその思いはどんな遠い物や目標にもきつと届くはずだ。だから頑張るんだ」

「父さん・・・」

スバルは大吾が家に帰ってきてから何一つ不自由の無い生活を送っていた。

一度は失いかけた幸せな家庭だった。

第10話「支配完了までのタイムリミット」

「フフフ・・・クリムゾンは順調に集まっておるな・・・特にロックマンとの戦闘で発生するクリムゾンの量はかなりのものだな・・・次は？よ・・・お前がロックマンを攻撃しろ・・・」

「はっ・・・」

次にロックマンの攻撃を命じられたのは若い女だった。

そのころスバル達はミソラから最近コンサートでノイズが発生することがあると連絡が来たためオクダマスタジオにいた。

「どう？スバル君」

「確かにこのスタジオは普通よりもノイズ率が高い・・・」

その影に例の組織の女がいた。

「やはりロックマンはここに異変があると聞いてやってきたようだ・・・ならばこのスタジオを攻撃してやろう・・・」

一方ブラックホールサーバーにいるFM星軍は地上戦がダメならと空中戦ができる兵士を選び敵陣へ送り込んだ。

しかしFM星空軍が敵陣に接近したとき何らかの力に引き寄せられFM星空軍は地表に叩きつけられた。

「我が軍の兵器を舐めるなよ。一気に討ち果たせ」

その攻撃によりF M星空軍はほとんどが討たれ残った兵は脱出しようと試みるがそれも空中に飛び立った瞬間に轟音とともに砕け散った。

空中に機雷が仕掛けてあったのだ。

生き延びようと逃げ惑う兵士達は無惨にも　ブラックホールサーバーに吞まれ死んだ惑星と同じ運命をたどった。

この戦いでもF M星空軍は全滅しその様はまさに地獄であった。

空軍の全滅を知ったF M星軍はどうすべきか迷い結局遠距離から牽制するように攻撃することしかできずそれらはほとんど無意味であった。

またF M星にも多くの兵士の訃報が届き民の間からこれ以上ブラックホールサーバーに手を出すことについての反対の聲が高まった。

これによりF M星軍は本星に引き返すしかなかった。

そのころ例の古びた屋敷の地下で

「今の状況はどうだ？」

「はっ・・・この調子でクリムゾンを収集すればもう後一ヶ月もすれば世界を陥れる準備が整いましょう・・・」

「そうか・・・まだ連中はなんの手がかりも掴んでおらんだろう・・・この戦いは我々の勝ちだな・・・もうすぐでこのリバースマシ

ンのエネルギーがMAXとなる・・・」

「リバースマシンエネルギーMAXまであと31日」

その時スバル立ちのいたオクダマスタジオに不思議な植物が各場所から生え始めたのである。

「フフフ・・・もうすぐこのスタジオは私の操る植物によって包まれる・・・」

スバルが異常なノイズ率の場所を発見したその時だった。

第11話「木属性の侵攻 前編」

その時スタジオは植物により侵攻を受けていた。

ウィルスは木属性ばかりであつというまにスタジオは植物に覆われた。

「フフ・・・ここから脱出したければ私に勝つことねロックマン・・・」

電波変換したスバルとミソラとゴン太は手当たり次第ウィルスをデリートしていた。

「木属性ウィルスばかりだ・・・うわっ!!」

すると突然ロックマンの足に植物の触手が絡みついていた。

「くっ・・・」

そして目の前に巨大なウィザードが姿を現した。

クラブ・ストロングだ・・・

「今度は・・・クラブ・ストロングか!」

クラブ・ストロング（以後ストロング）はスバルに近寄りストロングサイングを繰り出そうとした。

しかしロックマンはそれを避けた。

オーラを張り触手をはじき返していた。

すかさずバトルカードフレイムアックスで攻撃する。

これによりクラブ・ストロングは瀕死のダメージを受けた。

しかしクラブ・ストロングは植物に包まれ地面にもぐってしまった。

「くそ！何処行きやがった」

その時オーラを突き破るほどの力の触手が絡みついてきた。

これに掴まれロックマンも地下に引きずりこまれてしまった。

ミソラ側

「相手もなかなか強力ね・・・」

そこにロックマンと闘っていたクラブ・ストロングが現れた。

「貴方は・・・」

「ミソラ！コイツはあのストロングとは違うわ！」

ミソラのウィザードのハーブが答えた。

「確かに・・・スバル君が話してたように本物とは違う・・・」

ストロングはハーブ・ノートにコガラシを起こして攻撃してきた。

それを避けたがそこにストロングがストロングスイングを振りかざした。

「インビジブル！」

ハーブ・ノートはそれをインビジブルでかわしショック・ノートで攻撃した。

「バトルカード・・・ステルスレーザー・・・」

すると正面にウイルスが現れステルスレーザーを放った。

不意をつかれハーブ・ノートはまともに食らってしまった。

「バトルカードを使うってことは・・・だれかが操っているってこと?・・・」

そのころオックス・ファイアはロックマンの救出に向かっていた。

第12話「木属性の侵攻 後編」

ロックマン救出に向かったオックス・ファイア

オックス・ファイアはロックマンが引きずりこまれた場所から地下にもぐり襲ってくる植物の触手を燃やしていた。

触手はバラの茎のように棘があるため危険な存在だったが炎の前では役に立たなかった。

すると目の前にウイルスの大群が現れた。

「くっ・・・随分と多いぜ・・・」

「こんなやつら焼き払っちまえゴン太！」

そういつてオックスフレイムを使い一気にウイルスを燃やし尽くした。

しかし近くにあった植物にも燃え移りその火が燃え移り時間もたないうちに広がってしまった。

「まずい！早くロックマンを助けねえと！」

そして先にいたロックマンを助けウェーブロードに上がって非難した。

一方ハープ・ノートは

「ショックノート!!」

ストロングはそれをかわしストロングスイングでハープ・ノートを吹っ飛ばした。

そしてストロングの動きについてくるように襲ってくるバラの触手により大きなダメージを受けていた。

「バトルカード! ワイドウェーブ!!」

その攻撃もそう簡単には当たらない。

しかし何発か撃つうちにハープ・ノートは敵の動きを見切り攻撃を当てた。

「!?!? どうやらこちらのワンパターンな動きにはついてこれるようね・・・でもそんなに単純な動きばかりはしないわよ」

ストロングの動きは複雑になり攻撃を当てるのが難しくなった。

そこにオックス・ファイアがつけた火が回ってきた。

組織の女はそれに気づきすぐにスタジオを立ち去ったがストロングとハープ・ノートはその場に残っていた。

そのストロングも暴走させられ火が回るスタジオで暴れまわるだけだった。

ハープ・ノートはウェーブロードに非難し他のスタジオのスタッフたちは既に脱出した後だった。

残されたストロングは木属性のため炎には勝てず他の木属性ウィルスとともに炎の海に沈んだ。

オクダマスタジオはすぐに消火作業が行われ火は静まった。

これにより建物の一部は焼けてしまったが植物をとりはらうことはできた。

そしてスバルたちは今日はもう調査はこれまでと帰っていった。

~~~~~支配完了まであと 30 日 ~~~~~

### 第13話「空に蔓延る闇」

F M星軍がブラックホールサーバーから撤退した後シリウスグラードに撤退していたシリウス軍本隊がF M星宙域に戻ってきた。

「兵を整えることも完了した・・・そして今度はあれを使うかもしれない・・・」

到着したシリウス軍は早くもプロキオンにより再びF M星に侵攻した。

宙域にいたF M星軍はその襲来に気づかず最初から大きな被害を出した。

「くそっ！早く出る！この星を渡すわけにはいかん！」

しかしF M星軍の士気は低くほとんど抵抗できぬまま各個撃破されていた。

「報告！敵は最終防衛ラインに接近しています！！」

「なんだと！？もうそんなに突破されたのか！くそっ！新兵器を投入しろ！それしか防ぐ手立てはない・・・」

そして最終防衛ラインに大きな玉のようなものがいくつか置かれていた。

プロキオンは接近するミサイルを打ち落としながらそこに近づいていた。

「敵の最終防衛ラインに妙なものが配備されているな？あれは・・・」

その時その玉が光を放ちシリウス軍の視界を遮った。

そして轟音が鳴り響き展開していたシリウス軍の一部がやられていた。

「爆発だ！？この艦も被弾したか・・・」

「二発目来ます！」

「主砲だ！主砲を使い！」

サテライトブレイザーがFM星軍の兵器を破壊するが数は多く破壊しきれない。

「こうなれば・・・あれを使うしかあるまい！」

そのころ地球

「随分と変わった電波体を蘇らせたようだな・・・なんのデータも入ってないようだが・・・」

「はい・・・ですがだからこそ我らの手で染め上げやすいものでございます」

組織が蘇らせた電波体・・・それは紛れもなくエンプティであった。

## 第14話「VSダークエンプティ！」

オクダマスタジオでの事件から一週間後

スバル達の元に謎の組織の本拠地を突き止めたという報告が入った。

場所はナンスカ。

そこに建つ屋敷が怪しいという。

早速スバルとミソラとゴン太はスカイウェーブで現地へと向かった。

「確かにこんな場所なら組織が隠れていてもおかしくないなあ・・・」

「

目的地の屋敷は人気の少ない場所に建っていた。

中に入ってみると暗く誰もいなかった。

ただ古い家具などがあるだけだが僅かにノイズが発生しているとロツクマンに組み込まれているプログラムが示していた。

「どっかにスイッチでもあるんじゃないか？例えば絵の裏とかによ・・・ってあったぞ！！」

「え！？」

「ほ・・・ホント！？ゴン太！」

本当にそこにはスイッチがあった。

迷わずゴン太が押してみると地下へと続く階段が現れた。

これは偶然見つけたものだと思わず三人はその階段を降りていった。しかし絵画は複数枚あるうちのすべての裏にスイッチがあったということは彼らは知らない……

階段を下りた先は真つ暗な空間だった。

そこでスバル達を待ち構えていたものは……

「エンプティ！？何故こんなところに……」

「違う！！やつも偽者だ！闇のオーラが渦巻いてやがるぜ……いつてみりやダークエンプティってところだな……」

三人は電波変換して戦おうと構えた。

エンプティは巨大なレーザーを繰り出した。

以前とは違いどす黒い闇のエネルギーが混ざっている。

「スーパーバリア！……！？そんな……簡単に破られるなんて……」

その攻撃の威力は凄まじくスーパーバリアですら一撃で突き破った。だがその間にハープ・ノートとオックス・ファイアが背後に回り攻撃を仕掛けた。

しかしエンプティは突如闇の中に姿を消した。

「闇と一体化してやがる・・・空っぽであるやつだからこそこんなことができるのか！」

その後どこから来るかも分からない攻撃を避けるのに苦勞し続けだんだんと体力を消耗していった。

「く・・・相手の姿が見えないんじゃないやどうすれば・・・まてよ・・・見えないなら映し出すんだ！闇を映し出せ！バトルカード！ドッペルミラー！」

ドッペルミラーはエンプティの姿を捉え映し出した。

「ショックノート！」

その攻撃によりマヒしたエンプティは無防備になっていた。

「とどめだ！ムラマサブレード！」

その一撃によりエンプティはデリートされた。

しかしその基地には他に何もなくてこの基地は偽物だったということが分かった。

支配完了まであと 〳 21日〵

## 第15話「蘇る歴史」

エンブティが敗北したことを知った謎の組織

「あの電波体が敗れあの基地が偽物だということがばれたか・・・」

「はい・・・しかしあの基地には何もデータを残してはおりません。それよりも本日は面白いものを見つけましてございますのでそれをお目にかかってもらおうかと・・・」

「面白いものだ?」

すると幹部の男はあるデータが入っているチップを差し出した。

「才葉シティにある廃墟の調査を行っていたところ偶然発見いたしました。この中に昔ネットナビと呼ばれていた電波体のデータが入っているでございます。あの機械を使えば蘇生させることもできますよう」

組織のボスは感心したように言った。

「ほう。昔の電波体とはいえ中には性能の良いものもあるだろうな」

「それだけではありません。電脳獣というものを知っておりますか?」

「電脳獣?数百年前ネットワーク社会を混乱に陥れたあれか」

「はい。ネットワークの歴史にも出ているほど有名なものです。ございます。そのデータもこのチップに組み込まれておりました」

その日スバル達は

「それでは今日は電波社会の歴史の勉強をするぞ」

「はい！」

生徒たちはいつもどおり元気よく答えた。

「教科書124ページで今から200年ほど前の歴史だ。そのころはネットワークの事件が一番多かったからいろいろな歴史が残っている。例えば組織がいろいろとあったな。代表的なのはWWW ゴスペル ネビュラだ。ゴスペルは電波体のゴスペルを生み出し世界を手に入れようとした。ネビュラはダークチップを利用して一度日本のネットワークのほとんどを支配したことがある。ネビュラグレイを作り出したりもした。

WWWはドリームウィルスを作り出したが倒され壊滅したがその後あらたにプロトという電波体を作り出した。しかしそれも倒されたがまた復活し今度は電脳獣というのは作り出した。それも倒されたがな。この三つの組織はすべて一人の少年とウィザード・・・そのころはネットナビと呼ばれていたが。それに倒された」

そして授業は終わった。

その後でスバルは先生に尋ねた。

「先生。その三つの組織を壊滅させた少年ってどういう人だったんですか？それとネットナビも」

「そうだな・・・もう昔のことだからよくわからないがネットナビが何か特別な力を持っていたらしいぞ」

「特別な力かあ・・・」

そしてスバルはその少年とネットナビに興味を持ち調べることにしたのだった。

エンプティとの戦いからまた一週間が経っていた。

支配完了まであと　　ゝ14日ゝ

## 第16話「リバースマシン」

スバルはその日放課後電波社会の歴史について図書室調べていた。

「電脳獣・・・バグのかけらというものから生まれた二体の電波体か・・・」

そのスバルが調べている本に電脳獣はこうかかれていた。

グレイガ とてももないパワーを持ち鋭い牙で全てを噛み砕いたといわれる。ファルザーとの激闘の末にアンダーグラウンドに封印された。

ファルザー 桁外れのすばやさを持ち鋭いつめで全てを引き裂いたといわれる。グレイガとの激闘の末にアンダーグラウンドに封印された。

この二体はその後WWWの手によって復活したが1人の少年とネットナビによって倒された。

その後スバルはWWWについて書かれている本を見つけた。

## 目次

Dr・ワイリーについて・・・9

ドリームウイルスについて・・・13

電脳獣について・・・19

カーネル ・ アイリスについて・・・24

リバースマシンについて・・・28

その他の事件について・・・29

その目次にはスバルの目を引き付ける言葉があった。

「リバースマシン？」

それは1ページしかない項目だったがスバルが興味を示す内容だった。

リバースマシン

WWWが極秘に開発していた機械

デリートされたネットナビのデータの一部を修復することができる。  
しかしエネルギー源が無かったため完成はしていたもののあまり使われることは無かったという。

WWWの壊滅後この機械は紛失していた。

何者かが持ち出したという説が有力だが今となってはその真相が明らかになることは無いかもしれない。

スバルは他の項目も読んだがこのページほど興味を示したページは無かった。

しかしいくら本を読んでもWWWなどを壊滅させたのは少年とネットナビと書かれているだけでその名前などの詳しいことは一切書かれていなかった。

ほかにリバースマシンについて書かれている本は無かった。

これまでスバルは少しの間平穩の日々を過ごした。

だがこれこそが嵐の前の静けさというものかも知れない……

支配完了まであと　ゝ7日ゝ

## 第17話「謎の宣告」

それはある物静かな早朝

突然一部のテレビ局の放送が何者かの手によってジャックされた。

「日本に住む諸君！我々はこれより一週間以内に日本列島を全てわが手におさめる。

我らの名はそうなればすぐにも広がるであろうが・・・その前に言うておこう。我々の名はリバイバル・・・」

人々は驚き半信半疑でこの放送を聴いていた。

中にはこれを信じてはやく対処しなければと叫ぶものも居れば何かの番組の企画だろうと信じないものも居た。

しかしこの放送を聞いたスバル達はすぐにウェーブロードから放送の発信源に向かっていった。

「これはどう考えても今までの事件を起こしてきた組織が起こしたことだ！早く止めないと！」

「ああ！ついにやつらの正体を暴くときが来たぜ！」

そこで同じく放送を聴いたオックス・ファイアとハープ・ノートが合流した。

そのころ・・・

「これでやつらは混乱するだろう。我々はこの一週間の間に準備をし一気に落とすのだから」

「ロックマンが来ました！」

「やはりな・・・ちょうどいい。終わりにするのだ・・・グレイガを使え!!」

「はっ・・・」

そしてロックマン達が進むウェーブロードに地上からの攻撃があった。

ウェーブロードを閉ざされロックマン達が降りてみると一人の男が立っていた。

スバル達はその男に見覚えがあるように思った。

「あなたは!?!・・・細嶋陸斗先生!!」

「・・・行け! 電脳獣グレイガよ!!」

その人物が持つ特殊なハンターV.Gから大地を揺るがすほどのエネルギーを持つ電波体が出現した。

まぎれもなく電脳獣グレイガであった。

「それは・・・電脳獣!!」

「貴様が知っているとはなロックマン」

「そんな！！なんで貴方が！陸斗先生！」

「陸斗？俺はそんな名前じゃない。俺の名は海斗だ」

「あんたが先生かどうか知らないけど俺達の前に立つてんならその電腦獣とかいうのと一緒に倒していくぞ！」

オックス・ファイアが言った。

「電腦獣を倒すだと？貴様らごときにできるはずがないだろう」

グレイガの雄叫びに大地が揺れた。

「くっ！・・・やってやるさ！」

ロックマンは構えた。

## 第18話「囚われるロックマン！支配される日本」

ロックマン達はグレイガと交戦した。

グレイガの咆哮は凄まじい威力を持ち簡単に彼らを吹き飛ばしてしまっただった。

「バトルカード！ヘビーキャノン！！」

その攻撃はグレイガに直撃した。  
しかしグレイガは平然としたまま攻撃を続けていた。

「なんてやつだ！遠距離からの攻撃はきかねえぞ！」

「なんとか近づくことができれば・・・」

「ならば俺が！オックスタツクル！」

タツクルの勢いが強いいためグレイガの攻撃をすり抜けてヒットした。

「くっ！硬いな・・・スーパーArmorか！」

「グルルルル！！！」

グレイガの牙がオックス・ファイアを襲った。

「ぐあっ！俺のスーパーArmorが通用しない！？」

グレイガの牙はスーパーArmorをも砕くほどのパワーだった。

「ゴン太！電波変換をとけ！」

オックスが言った。

危険になったオックス・ファイアは電波変換を解いた。

その瞬間電波のエネルギーによって地面に叩きつけられたがなんと軽い傷ですんだ。

しかしゴン太の体力はもはや残っていなかった。

「これなら！ショック・ノート！」

「まだ抗うか。よかろう。終わりにしろグレイガ！」

グレイガの口から轟々と燃え盛る炎が噴出した。

その炎にロックマンもハープ・ノートも包まれた。

「こんなに強い炎じゃバトルカードでも消せないわ！早く逃げないと――！」

「ダメだ！ゴン太が動けないんだ！この炎を食い止めないと――！」

しかし水属性のバトルカードをいくらかつかったところでこの炎は消せなかった。

「ハハハ！このままでは逃げるしかあるまい！友を見捨ててな！できないのであればおとなしく降参しろ！」

「・・・わかった・・・」

「やはりな・・・友を見捨てていくことなどできないのだろう？貴様が掲げるキズナとやらのためにな」

この日ロックマン達は悪の組織リバイバルに囚われてしまった。

そして週末

各地に潜伏していた電波体が次々と姿を現した。

その週の間にリバイバルからなんの音沙汰も無くいたづらだったのだろっと思っていた人々は何もできぬままただ逃げ惑うだけだった。

サテラポリスも出動したが数が多いため敵わずその一日で日本のサテラポリス本部は陥落した。

ここにリバイバルによる支配が成ったのである。

## 第19話「破壊兵器ベテルギウス！」

### 宇宙

「このままではFM星に近づけん！ベテルギウスをだせ！」

FM星軍がこの戦いに投入した新兵器は球状をしており敵が近づくと眩い光を放ちあたりの温度を一気に上昇させるものでこれはFM星に近づこうとするシリウス軍を苦戦させた。

しかしその新兵器の中に突入するロボットがあつた。

シリウス軍が所持していたプロキオンに並ぶ兵器のベテルギウスである。

ベテルギウスは獣のような姿をした巨大な自立機動型ロボットでパワー・スピード・装甲においてかなりの性能を誇っていた。

このロボットにはFM星軍の新兵器も通用しなかった。

仕方がなく付近の宙域に展開したFM星軍であつたが誰もベテルギウスに太刀打ちできずシリウス軍は着々とFM星へ進軍していた。

### そのころ地球

支配された日本はすべてのウィザードが捕らえられ事実上武装解除された。

これは電波だけで支配できるほど電波の力は強くなっておりそれだけ人々が電波に頼っていたということを示していた。

そしてある病院のベッドが空になっていた。

そんな時スバル達は屋敷内のどこかに囚われていた。

電波変換しても特殊なロープに縛られ脱出しようと試みても全くの無駄だった。

そこにリバイバルのメンバーの男が来た

「ロックマン！ボスが呼んでいる！出て来い！」

その男に引っ立てられ連れて行かれたのは研究所のようなところだった。

「こ・・・ここは？・・・」

「ここはお前のデータを手に入れるための場所だ」

何処からとも無くリバイバルのボスが現れていった。

「アンビション様・・・確かにつれてまいりました」

「よくやったローヤル・パスト」

組織のボスが言った。

「お前が組織の親玉か！」

「いかにも・・・」

「何でこんなことをするんだ!」

「そんなの己がために決まっておろう。そしてそのために貴様の持つノイズを制御する力を取り出すのだ!」

そこにはリバースマシンが置かれていた。

ロックマンはリバースマシンに繋がれエネルギーを吸収されていた。

「うっ!・・・」

「苦しかろう。貴様の中には膨大なデータが入っているのだからな!」

しかしリバースマシンは急におかしな動きを始めた。

ロックマンの体に僅かだかロックマンのものではない以前吸収したエネルギーが逆流していた。

そしてリバースマシンから一体の電波体が勢いよく飛び出した。

「どうしたのだ!?何が起こった!」

この動きはすぐに止まりリバースマシンはまた正常に動き始めた。

エネルギーの逆流と電波体の出現をアンビションもロックマンも気づいてはいなかった。

そして宇宙・・・

F M星はシリウス軍が侵攻しており緊迫な状態であった。

そこに駆けつけたものがいた。

A M 3 賢者であった。

3 賢者はシリウス軍とベテルギウスを撃退した。

## 第20話「ノイズの異変」

「皆のものよ！ついに我々の共通の目的を達成することができた！これ以降は各自己が目的のために動くといい」

その後リバイバルのメンバーたちはそれぞれの目的の達成のために動いた

「もう少しだ・・・もう少しで」

ある小さな森の中・・・

組織の若い女が何かをしていた。

「懐かしい・・・組織に入ってからしばらく来てなかったんだっけ・・・でも私はこのために組織に入ったのだから」

ふと彼女の目の前に小さいウィザードが見えた。

しかし手を伸ばすと過ぎ去ってしまった記憶は儚く消え去った。

そして例の研究施設

「ロックマンのデータは編集が完了したな。あとは俺にとって必要な部分を切り取るだけだな・・・あれを復活させて俺はあの方の意志をつぐんだ」

そのころ屋敷のセキュリティシステムが作動した。侵入者があったことを知らせている。

「侵入者か・・・ローヤルよ！食い止める！」

「電波ウイルスごときに守らせてもむだだ！」

「侵入者というのはお前か？」

進入者というのはアシッド・エースだった。

「誰だ！」

「アシッド・エース・・・いや暁シドウか。俺はローヤル・パストだ。俺のことを忘れたか？」

「ローヤルだと！キングに育てられ俺のように逃げ出したお前がこんなことをしていたのか！」

「お前こそサテラポリスなどになるとはな。ミスターキングの恩を忘れたのか？」

「どうせお前も俺もディーラーの裏切り者だろ？サテラポリスかこんな組織かなんて関係ないな」

「違うな。俺は裏切ったのではない。俺は単独行動をとることを選んだだけだ。そして今おれは・・・ミスターキングの意思を継ぐつもりだ！！」

「ならお前は結局俺の敵ってわけだな？」

「その通りだ。俺は知っているぞ。お前の病気はまだ治ってはいない。ならば少し電波体を戦わせれば十分だということもな」

ローヤルはハンターV Gからファントム・ブラックを繰り出し暴走させた。

アシッド・エースは暴走したファントムブラックと戦い始めた。

そのころ

「ヒヤッハハハハ！！暴れるファルザー！！！！全てを破壊し尽くせ！！」

組織のボスにスカウトされ遅れて入ってきた男は電腦獣ファルザーを使って外国へ無差別攻撃を仕掛けていた。

そのツメの威力は凄まじくこの一体だけで一つの国が簡単にその支配下に置かれるほどだった。

そんな時ロックマンの体に異変が起こっていた。

ノイズ率が異常なほど高い数値を記録した。

「スバル！！今ならファイナライズできそうだぜ！」

「確かにこのノイズ率なら・・・よし！！ファイナライズ！！」

## 第21話「ノイズの力と獣の力」

アシッド・エースのソードと暴走したファントム・ブラックのステッキソードが互いにぶつかりあっていた。

「シドウ。あまりここで時間をかけると体かもちません」

アシッドが忠告した。

「もちろんすぐに終わらせるつもりだアシッド。わかるな？」

「ソード攻撃に最大パワーを設定します」

「よし。ロックオンだ」

アシッド・エースの攻撃は早かった。

ファントム・ブラックのステッキソードが振り下ろされる前に既にこの暴走した電波体をデリートしていた。

「細嶋海斗よ。ローヤルはどうしたか？」

「はっ・・・どうやら基地外へ出たものかと思われます。また高いエネルギー反応も出ております」

「何？そうか。やつは最初の自分の目的のため動いたか。して持ち出されたものは？」

「・・・クリムゾンドラゴンのデータかと思われます」

組織のボスは予想通りだという顔で言った。

「やつがあれを欲していたのは分かっておったわ。ならば好きにやらせてもよからう。後で邪魔になれば始末するだけだ。それまでは・  
・・・」

ファイナライズしパワーのあるレッドジョーカーに変身したロックマンの姿は今までと

違いさらにパワーが溢れるかのようにだった。

「この力はいつたい？」

「グルルル！血が騒ぐぜ！」

赤いボディに緑が混じりスーパーアーマーの装甲はより強固なものへ  
今ならどんな敵でも倒せる。  
そうおもえるほどだった。

その時のロックマンを止められるものなどなくロックマンたちは閉じ込められていた場所を脱出した。

小さな森で

組織の女はその時だけまるで少女に戻ったかのような心境だった。

目の前はさびしく目立たない植物が生えているだけだった。  
しかし目を閉じればそこは美しい花があたり一面に咲いており一体

のウィザードが少女と共に走り回って遊んでいた。

少女とウィザードは毎日のようにそこで遊んでいた。

少女が風邪を引いて家で一人ぼっちのときもその少女の家にウィザードがやってきた。

ウィザードはその少女の心の支えだった。

「そしてこれが最後の記憶・・・」

その女の顔は一瞬悲しみの表情になった。

その頭の中ではつらい記憶をかみ締めているようだった。

「これからは新たに私が造るもの・・・」

女はハンターV.Gを掲げた。

その中には形だけの電波の塊がデータとして記録されていた。

「電波変換！！！！」

## 第22話「ファイナライズ・ビースト」

「！？ロックマン達が脱走した模様です！！」

「何だと！？ばかな・・・やつがファイナライズしたとしても逃げ出せないようにしてあったというのにか！！」

これは流石の彼にも計算外だった。

「やつの体からファイナライズを超えるエネルギー反応が出ております！」

そのころロックマンは基地内を破壊しながら進んでいた。

多くの電波体がそれを止めるため立ち塞がったが敵うはずもなく一撃でデリートされていた。

そんな時ロックマン達のもとにアシッド・エースが合流した。

「ロックマン！凄いな その姿は？」

「わかりません。ただ・・・心を平常に保たなければ自分が支配されてしまいそうです」

「それはどうやら単なるレッドジョーカーじゃないようだな。まるで電脳獣グレイガのようだな」

「何故そんな力が僕に？」

「分からないが何かの拍子で入ってきたということだな」

「もしかして。僕がデータを取られたときに・・・」

「その可能性が高いな。まあその姿はさしずめファイナライズ・ビーストって所かな？」

「ファイナライズ・ビーストか・・・」

スバルは深く考えながら呟いた。

「かなり強力なパワーを持っている。だけど自分自身を制御できなければその力は暴走してしまうだろう」

そこに電脳獣グレイガと細嶋海斗が現れた。

「ロックマン。どうやら知らぬ間に大きな力を得たようだな」

「電脳獣の力だ」

アシッド・エースが変わりに答えた。

「なるほど。だがそんなもので本物の電脳獣に敵うか？」

「今度は負けない！」

グレイガは再び炎を吐き出しロックマン達を包もうとした。

しかしロックマンの装甲が体を張ってこれを止めた。

「グレイガの炎が通じないだと？ならば噛み砕け！」

グレイガは猛烈な勢いでロックマンに迫った。

「力が溢れてくる。今ならできる！レッドガイアイレイザー！」

そのビームは一瞬にしてグレイガを呑み込んだ。

ノイズとビーストの強大な力の前にその電脳獣のエネルギーはひれ伏すしかなかった。

レッドガイアイレイザーの威力はかなりのもので基地のほとんどが破壊された。

「あいつはどうしたんだ？」

「どうやらグレイガを置いて逃げたようだな」

「そうか・・・行こう！ボスを倒すんだ！」

## 第23話「終わらない戦い」

「もー我慢できないわ!!」

「落ち着いてください委員長!!僕たちがいったって・・・」

「ロックマン様が戦っているっていうのに私達だけがこんなところに居ていい分けないでしょ!行くわよキザマロ!!」

そういうとルナは組織の基地のほうへと向かい始めた。

「待つてくださいよ委員長~~~~!」

ロックマン達はリバイバルのボス・アンビションの元にやってきた。

「まさか貴様がこんなところまで来るとはな。計算外だった」

「もう終わりだね。お前に勝ち目は無い」

「残念だったな。わたしはそう簡単にあきらめるような人間ではない。リバースマシンはここにあるのだよ」

アンビションはリバースマシンからブラックエースの姿をしたロックマンを出現させた。

「ロックマン。これが貴様のデータだ。だが貴様は今このデータを越えるほどの力を持っている」

「その通りだ」

そのころルナ達は基地の中に入った。

しかしすぐにウィザードに捕らえられてしまった。

「だからいったじゃないですか」

「僕は今まで以上の力を手に入れた」

「ああ・・・だが貴様はその強大な力さえも鈍らせてしまつような弱点を持っている」

「何？」

「それは貴様が言うキズナの力だ」

「キズナが弱点だって？そんなわけない！」

「これを見てもそんなことがいえるか？」

その時ウィザードに引つ立てられルナとキザマロがやってきた。

「委員長！キザマロ！」

オックス・ファイアが驚いていった。

「何でこんなところに！？」

「これは俺も予想していなかったことだがまあ運が良かったのだろ  
う。貴様はもう何もできまい。それが貴様のキズナの弱点だ！弱い  
ものを守ろうとして自分が傷つくんだ！かつての私のようにな！！  
」

「何だって！？・・・」

「少ししゃべりすぎたか。まあいい。ブラックエースよ！そいつら  
を消し去れ！」

しかしブラックエースはアシッド・エースの一瞬のソード攻撃によ  
ってデリートされていた。

アンビションはルナとキザマロをつれたまま逃亡した。

背後に逃げるための飛行機が用意されていた。

空中で彼は叫んだ。

「暁シドウ！！聞こえるか！今度このような真似をすればこいつら  
の命は無いと思え！」

「くそ・・・逃げられてしまったか。すまないなロックマン。俺の  
行動はもしかしたらあの二人を傷つけてしまっていたかもしれない」

「シドウさん・・・いえ・・・僕には何もできなかった。友達を盾  
にされて・・・前の戦いでハイドがこんな方法を使っただけ・・・  
あの時はハイドは僕たちの覚悟に引き下がった・・・だけどあいつ  
は・・・本気だろう・・・」

## 第24話「全てを破壊する電腦獣vs無頼の強者」

ロックマン達は各地に散らばったりバイバルのメンバーを倒すためそれぞれ別行動をとっていた。

そのころ外国の征伐から戻っていた？5はある戦士を追っていた。

その戦士は人里離れた山奥で発見された。

「ここにいたのか。なあブライ？」

「・・・何者だ」

ブライが聞いた。

「俺の名はロンリネス。リバイバルのメンバーだぜえ」

ロンリネスは電腦獣ファルザーをハンターVGで操っていた。

「電腦獣か・・・そんなもので俺に勝てると思うのか？」

「電腦獣の力は強大だ」

「だがお前は俺を倒せない。俺は誰にも頼らずに生きていける強者以外に負けるつもりは無い」

「ヒャッハハハハ！！笑わせるなよ！！ロックマンに敗北した貴様が！！それに俺は誰にも頼ることの無い強者だ！！」

「電脳獣などに戦わせようというお前がか？」

ロンリネスはこの言葉に冷静さを失った。

「貴様ああ！俺はずっと誰にも頼らずに生きてきた！おれはお前と同じようにキズナなど認めては居ない！見てろ！電波変換！！」

彼は電波体と化した電脳獣と電波変換を行った。

その外見は人間の形をしているが中身は破壊を常とする電脳獣であった。

翼と鋭いつめを持ちどんな電波体でも狩ってしまうような気迫だった。

この電波人間を名前で呼ぶとしたら「ファルザー・ハンター」と呼ぶのが妥当だろう。

「みたかブライよ！俺は自らの力で戦うぞ！」

「自らの力だと？それは違うな。その力は電脳獣のものだ。お前は何の力も無い。力の無いものが力を使いこなすことはできない」

「黙れ！それは力で証明してやろう！この力があれば貴様など一ひねりだ！」

スバルはまず支配された町を開放するため戦いを始めた。

組織のボスが司令塔を離れたため電波体は弱体化していた。

しかし一部では突然暴走を始めたという例や急に消えてしまったという報告もある。

これはおそらくリバースマシンのエネルギーが足りなくなったのであろう。

「やつは必ずどこかに姿を現す・・・リバースマシンを動かすにはクリムゾンが必要なんだ」

その時ロックマンの変身が解けた。

「どうやら長時間この姿になっているのは無理みてえだな」

「残念だけどどうやってまたあの姿になるのかわからないね」

コダマタウンについた。

この町はウイルスや暴走したウィザードが占領していた。

町を救うためロックマンは戦い始めたがそこに一体の電波体が近づいていた。

## 第25話「感情なきデータ」

ロックマンが戦うコダマタウンに現れた電波体

それは・・・

「！！ジェミニ・スパーク！」

ジェミニ・スパークは二体同時の攻撃であるジェミニ・サンダーで攻撃してきた。

「ツカサくん・・・じゃないね・・・あれは単なるデータだ」

「また来るぞ！避けるスバル！！」

ロックマンはその攻撃をかわしソードで切りかかった。

ジェミニ・スパークの片方がそれを受け止め片方が切りかかった。

「バトルカード！シュリシュリケン！」

その攻撃は切りかかろうとしたほうのジェミニ・スパークに当たった。

片方がデリートされた。

さらにロックマンはソードを受け止めている手の反対の手でパウダーシュートを撃った。

残ったほうのジェミニ・スパークもデリートされた。

するとオックス・ファイアとハーブ・ノートが現れ攻撃をしてきた。

「あれはデータなんだ。僕のブラザーとは違う！だけど・・・僕は自分の手で仲間を傷つけるのをみなくちゃならないなんて！！」

「落ち着けスバル！2対1じゃ分が悪いぜ。ノイズ率も上がってるんだ。ファイナライズしろ！！」

「ファイナライズ！・・・いや・・・これはファイナライズ・ビーストだ！」

ロックマンは再びファイナライズ・ビーストに変身した。

しかし今度はブラックエースの姿に赤が混じり赤い翼が生え手には鋭い爪が付いていた。

「今度はブラックエースとファルザーとかいうやつか」

ロックマンはその翼を使い飛び始めた。

それはいくら動体視力が良くても捉える事ができないような速さであった。

「いくらデータでも仲間の姿を傷つけない・・・だけど僕の身体の中にあるビーストの力が敵を倒せと騒いでいる・・・」

ロックマンはリバースマシンによって作られたオックス・ファイアとハーブ・ノートを一撃でデリートした。

しかしその瞬間どこらか声がした。

「ロ・・・ロックマン・・・」

これはゴン太とミソラの声だった。

「!?!?・・・これは!?!?」

デリートされた電波体の中にはテープレコーダーが仕込まれていた。

「落ち着けって言ってんだろ!!あの声は偽者だ!」

しかしスバルの心はビーストの力によって支配されウォーロックの声は聞こえていなかった。

そして声が出ているテープレコーダーをその周辺の地面ごと破壊した。

それでもロックマンは飛び続け自分自身を制御できないでいた。

そのころ

ブライはラプラスのソードでファルザー・ハンターに切りかかった。しかしファルザー・ハンターは爪でそれを抑えパワーでねじ伏せようとしたためブライは後ろへ飛び退いた。

「ヒヤハハハ!!パワーがねえなあ!」

「・・・・・・」

ブライは拳の衝撃波を飛ばしたがそれもファルザー・ハンターの起す風によって届かなかった。

## 第26話「孤高と孤独」

「食らえ！」

ファルザー・ハンターは羽をブライに向かって撃った。

ブライはそれをすべてソードで受け止めてまた切りかかった。

ファルザー・ハンターは爪を振りかざしたがブライはその横を素早く潜り抜けて背後から切った。

「ぐわああ！くそおお！！」

爪を振り回し攻撃するが全て避けられる。

ならばとファルザー・ハンターは翼を使い空へ飛んだ。

「上空へは攻撃が届かないか」

「そうだぜえ。貴様はもう攻撃できない！」

そして上空から羽を飛ばしたがどんなに攻撃しても当たらない。

このままではどうにもならないと今度はブライ目掛けて突っ込んだ。

ブライはその瞬間ソードを投げて素手でそれを受け止めた。

投げたソードはブーメランのように戻りファルザー・ビーストの背中に直撃した。

「何故だぁ・・・何故一方的にこっちらがやられるんだ!!」

「教えてやろう。それはお前が弱いからだ。お前が1人で生きていける強者じゃないからだ」

「ぐ・・・俺はずっと1人で生きてきたんだ!誰にも頼ってなど居ない!バトルカード!ウォリアーブラッド!!」

そのバトルカードは彼の攻撃力や防御力を一気に強化し副作用も電脳獣の力には効かなかった。

「これでどうだ!」

「結局バトルカードの力を借りるか。だからお前は弱者だ!!」

「今黙らせてやるぜえ!てめえを引き裂いてなあ!!」

それは今まで以上のスピードで鋭い爪が炸裂した。

しかしそれでもブライには当たらない。

「それでもか!!ならば!!」

彼はパワーを集中させた。

そしてそのパワーを一気に開放しながらブライに突撃した。

そのパワーによって周辺が包まれた。

「終わりにするか」

ブライは剣に力を集中させブライブレイクを使って突っ込んでくる敵に向かった。

「ズバッ！！！！」

何かが斬れる鈍い音がした。

ファルザー・ハンターが言った。

「相打ち……だと？……」

「違うな」

ブライが言った。

ブライは無傷だった。

「電波障壁だ。真にキズナを否定し孤独を受け入れたもの……孤高の戦士だけが手にするものだ。それをお前には打ち破れなかった」

「俺は……孤独を受け入れられなかったということか？……確かに俺は……孤独に育った。親や兄弟も……友人もできなかった。だから俺は何かを破壊し続けた。そうすることで孤独を紛らわせようとしたのか……」

そう言ってファルザー・ビーストはデリートされ人間の姿に戻ったロンリネスが倒れていた。

「何かに頼らなければ孤独を克服することができない者に俺は負けない」

ブライはそっくり残して去っていった。

## 第27話「復活！クリムゾンドラゴン」

暁シドウは高いノイズが記録される場所を転々と辿っていった。

すると彼には見慣れた基地のようなところに出た。

「やはりここか・・・」

彼は中に入っていった。

中であつた施設は再び稼動しており何か大きなノイズのエネルギーがあつた。

「来たか。シドウ」

シドウ「やっぱお前かローヤル。クリムゾンドラゴンを再生させるつもりなんだろ？」

「そうだ。俺はミスターキングの意思・・・ディーラーの意思をついでこの世界を作り直す！！」

「そうしようとした者たちが結局どうなつたか覚えているだろ」

「ああ・・・グレイブ・ジョーカーは消滅しクインティアとジャックは裏切つた。ハートレスなどは最初からスパイだったな」

「それにキングもあの戦いでロックマンに負けて行方不明だ」

「この世界をクリムゾンドラゴンで滅ぼしキングを見つけ出す。そ

して共に新たな世界を作る・・・だがその前に。お前をここで消し去る！」

ローヤルがハンターV.Gに指示を出すと機械の中から再生されたクリムゾンドラゴンが出てきた。

「やれやれ。電波変換だアシッド」

「了解ですシドウ」

シドウは電波変換してアシッド・エースになった。

「貴様の身体がこいつを倒すまで持つかな？」

「力尽きるまで戦ってやるさ」

アシッド・エースはクリムゾンドラゴンに斬りかかった。

クリムゾンドラゴンを斬ったが斬った場所がすぐにノイズで修復されていった。

「無駄だ。そいつはノイズでいくらでも復活する」

「くっ・・・スバルに倒し方聞いておけばよかったぜ」

「シドウ。やつの内部にコアがあるようです。それを破壊すればやつは倒せます」

アシッドが敵を分析して助言した。

「よし！コアをぶった切ってやる！」

彼はクリムゾンドラゴンを頭から切り伏せた。

するとクリムゾンドラゴンは頭が二つに分かれコアが出現した。

「いまだ！ロックオン！」

「させるか！食らえ！」

クリムゾンドラゴンはコアからビームを放った。

「くっ！バトルカード！」

アシッド・エースはそれでも敵のコアに突っ込んだ。

アシッド・エースの攻撃はコアに直撃したが彼自身もビームの直撃を受けた。

そのころ

ロックマンの元にオックス・ファイアがやってきていた。

「ロックマン？」

「ゴン太か！助けてくれ！スバルが暴走しちまった！」

オックス・ファイアはそれは大変だとロックマンを止めにかかった。

## 第28話「ビーストの蒼き戦士」

オックス・ファイアは暴走するロックマンに向かって行った。

ロックマンは相手が誰であろうと容赦なく襲い掛かった。

ファルザーの爪がオックス・ファイアをスーパーアーマーごと引き裂いた。

「ぐおっ！　だけどグレイガの時ほどパワーは無いぜスバル！」

オックス・ファイアは反撃をしようとするが早すぎて当たらない。

ロックマンはバトルカードを駆使してオックス・ファイアを傷つけていった。

「くそ・・・スバル！　お前はブラザーを忘れるようなやつじゃないだろ！」

しかしロックマンの目にはオックス・ファイアに変身しているゴンは敵としか見えていなかった。

そのころ

「直撃を食らったか。これで終わりだな」

ローヤルがアシッド・エースに言った

「どうかな？」

彼は傷つきながらも立ち上がった。

攻撃を受ける寸前にスーパーバリアを張っていた。

「くっ！しぶといやつめ」

「だがこれでクリムゾンドラゴンのコアは破壊した」

「残念だったな。クリムゾンドラゴンはクリムゾンがあればいくらでも再生する。しかしそれには多くのクリムゾンが必要だが・・・全国でこれほどウィザードが暴走しているのだ。それくらいのエネルギーはある」

クリムゾンドラゴンはコアの部分ごと新たなクリムゾンによって再生した。

「こりゃ参ったな。復活しちまうか」

「やつを倒すには全てのクリムゾンを消費させるか一撃で全体をデリートするしかありません・・・しかし・・・全てのクリムゾンを消費させるまでシドウの体力は持ちません。かといって一撃でデリートするとしたらこちらはどうなるかわかりません」

「やるしかないだろ？アシッド。一撃で決めるさ。それで俺がどうなっても構わない」

「スバル・・・お前はいつもみんなを守ろうと必死だった。だから仲間が喜べばお前も喜んで仲間が悲しんだらお前も悲しんだ。いつ

もそうだった。俺達はお前に助けられていた。そのせいでお前は今、こんなになっちまった……」

ロックマンは微動だにせずに聞いていた。

「だから俺はお前を止める！仲間として！ブラザーとしてな……！」

ロックマンはパワーをためブラックエンドギャラクシーをつかって  
オックス・ファイアに向かった。

オックス・ファイアは動かなかった。

それどころか彼は電波変換を解いた。

「こい！！スバル！」

「！？」

これにロックマンは一瞬動揺した。その一瞬……蒼い電波体がロックマンの身体の中に入った。

ロックマンの電波変換は解かれた。

「ごめんよゴン太……僕の心が弱いばかりに」

「スバル……気にするなよ。弱けりや協力して強くなればいいんだ！それがキズナつてもんだろ！」

そういつてゴン太はスバルを励まし共に進んでいった。

スバルのハンターV GのログにはROCKMAN EXEとだけ書かれていた。

## 第29話「意志の行く果て」

「お前にクリムゾンドラゴンは倒せない！ディーラーの意志！ミスターキングの意志は！裏切り者のお前にはな！！」

「俺もお前もディーラーを抜け出した。今さら意志なんかあるか？」

「俺はお前とは違う。俺はミスターキングに忠誠を誓っていた。だから俺はミスターキングに何かあったときのためとして組織を離れていたんだ！」

「だがもう組織はない！お前は何故そこまでしてその意志を継ごうとする！！」

「俺がミスターキングに忠誠を誓ったからだ！俺はミスターキングとその意志に忠誠を誓っていた！」

「それはお前の意志じゃないだろう！お前は俺やディーラーの人間のようにミスターキングに育てられた。けどお前は・・・この世界を作り直したいなんて考えては居なかった！」

「俺の意志でなくてもそれはミスターキングの意志だ！俺はそれを継がなければならないんだ！！やれ！！！」

クリムゾンドラゴンは号令と共に爪でアシッド・エースを引き裂こうとした。

アシッド・エースはそれを飛び退いて交わした。

「シドゥ。エネルギーをチャージします。それまで耐えてください」

「わかった。バトルカード！インビジブル！」

彼はそのまま動かない。

「時間稼ぎだと？ばかな。そんなことをして不利になるのはお前だぞ」

クリムゾンドラゴンはインビジブルが切れると共に攻撃したがアシッド・エースはそれを避けた。

何度も攻撃するがアシッド・エースは避け続けた。

「当たらないか。だが攻撃しなければ倒れるのはお前だ」

そういつた瞬間アシッド・エースは再びクリムゾンドラゴンを真つ二つに斬った、

またコアが出現した。

「シドゥ。エネルギーのチャージが完了しました」

「よし。ウィングブレ……」

しかしアシッド・エースは姿勢を崩した。

体力が蝕まれ立つことが難しかった。

「やはりお前は長時間は戦えない。逃げ回ったところで無駄だった

んだよ！！」

「……………」

彼は力の入らない身体に鞭打ち再び立ち上がった。

「何故だ。何故そんなにボロボロになっても立ち上がることができる！」

「教えてやるよ。それは俺自身の意志だからだ！！誰かのために戦いたい！それが俺の意志だ！いくぞ！ウィングブレード！！」

彼はこの一撃に残りの力を全て注いだ。

「お前の意志の力だと！？…………これで終わらせるつもりか！ミスターキングの偉大なる意志はお前などに負けない！クリムゾンを全て使い果たしてもやつを倒せ！クリムゾンドラゴン！」

クリムゾンドラゴンはコアからビームを放った。

その力は膨大な量のクリムゾンを使い凄まじかった。

だがアシッド・エースのウィングブレードはその力をも押し返しクリムゾンドラゴンのコアを貫いた。

クリムゾンドラゴンは吹っ飛んだ。

「馬鹿な！？再生しろ！クリムゾンドラゴン！」

しかしクリムゾンドラゴンはもはや再生できないほどに破壊されて

いた。

クリムゾンの残骸の中からアシッド・エースが這い出した。

「ローヤル・・・お前は自分の意志を持つべきなんだ！他人の意志なんかじゃない。自分の意志を持つことによって人は強くなれるんだ！」

「俺が・・・自分の意志ではなくミスターキングの意志のために戦ったから負けたというのか？くっ・・・確かに俺は自分で世界を作り直したいとは思わなかった。全てを終わらせてからミスターキングを見つけて後を任せればいいと思っていた。だが俺は・・・本当はこの世界が好きだった・・・」

「そうだ。それがお前の意志だ。過去の歪んだ忠誠なんかのためにお前がやりたくないことをやらなくなたっていいんだ」

「暁・・・」

アシッド・エースは力尽きて倒れ電波変換が解除された。

その時その基地の中にサテラポリスが突入した。

スバル達は既にサテラポリスを取り戻していた。

ローヤルは逮捕され暁シドウは病院に運ばれた。

激しく体力を消耗していたものの命に別状はなかった。

リバイバルのメンバーの二人目が倒されたのであった。

### 第30話「力と技の融合」

スバルはゴン太と共に各地に点在する暴走ウィザードを倒していた。今ではサテラポリスの組織も回復し日本はリバイバルの支配から解放されつつあった。

そんな中でもまだサテラポリスでもまだウィザードを追い払えない場所があった。

そこにはリバイバルのメンバーの細嶋海斗がいた。

スバルとゴン太はそこに向かった。

「来たな・・・星河スバル」

「海斗・・・お前はいつたい？」

「俺は細嶋海斗・・・陸斗の兄だ」

「陸斗先生のお兄さん？」

「その通りだ」

「なんでこんなことをしたんだ・・・」

「お前に教えるようなことではない。だが目的がある。そのために

「お前を倒す！」

海斗は電波体を取り出した。

電波変換する前のブラキオ・ウェーブだ。

「電波変換！！」

彼が電波変換した姿は恐竜のような姿をしたブラキオ・ウェーブとは違い人の形をしていた。

「ブラキオ・ウェーブじゃ・・・ない？」

「電波変換は同じ電波体でも相手の人間によって変わるからな。あいつの場合は陸でも戦えるってわけか」

「掛かって来い！ロックマン！」

スバルとゴン太は電波変換した。

「行くぞ！バトルカード！ヘビーキャノン！」

「オックスフレイム！」

しかし海斗は電波からウェーブを作り出しその攻撃を押し返した。

そしてウェーブはロックマンとオックス・ファイアに当たった。

特に水属性の攻撃はオックス・ファイアには大きなダメージだった。

「お前らの攻撃はその程度か」

「まだまだ！バトルカード！エドギリブレード！」

海斗は再びウェーブを起こした。

ロックマンはそのウェーブをエドギリブレードで斬った。

するとその衝撃でウェーブは消滅した。

「その威力・・・連続で選んだか」

ロックマンは今度は敵に向かって斬りかかった。

「バトルカード！ソードファイター！」

彼はソードファイターで応戦した。

しかしそこをオックスファイアがタックルをかました。

「ぐああ！貴様ああ！」

彼はあたりに大量の水を発生させそれを渦にしてロックマンとオックス・ファイアを呑み込もうとした。

「！！これ以上友達を傷つけさせてたまるか！！」

ロックマンは無意識にファイナライズした。

その姿はブラックエースとレッドジョーカーが融合したようであっ

た。

### 第31話「離れ離れの愛」

オックス・ファイアは渦によって動けなくなっていた。

「なんだ・・・その姿は？」

「何故だか分からないけど僕にはなんとなく分かる気がする。友達を守りたい。そういう思いが生み出した奇跡だ！！」

「奇跡・・・か。だが俺も負けるわけには行かない！！」

ロックマンは海斗が生み出した渦をレッドジョーカーの持つパワーで一瞬にして吹き飛ばした。

そしてロックマンは彼に向かってブラックエースの持つスピードで迫りソードで斬りかかった。

海斗はそれをバトルカードのソードで受け止めた、がその一撃の重さに耐え切れずソードの攻撃を食らった。

ロックマンは攻撃の手を緩めず何度も斬りかかった。

海斗はいくらかは受け止めたものの何度も攻撃を食らった。

「ぐ・・・負けられない・・・なんとしても勝たなければならない理由があるんだよ！！バトルカード！リカバリー！ウォリアーブラッドー！」

その効果により彼は体力を回復しパワーを上昇させた。

「そして俺にはこれがある。これが何かわかるか？ロックマン？こいつは今まで再生させたウィザードを暴走させてきたものだ」

彼のハンターV.Gに組み込まれているプログラムは再生したダイヤ・アイスバーンなどを暴走させたものだった。

「こいつは俺が作り出した装置。こいつを使えば電波体の能力を極限まで上昇させられる。だがリバースマシンで再生されたような電波体は暴走しちまったがな。これは電波人間が使ってもその身体を蝕むことになる」

「なんだと！！何故そこまでしておめえは！」

「俺の目的・・・それは離れ離れになった恋人を探すこと・・・それと病気の母親を救うことだ！」

「なんだって？・・・」

「俺とその恋人はお互いに同じ道を歩んでいこうと誓っていた。だが五年前、俺の母親は思い病気にかかった。それで俺は急に母親の病院に行かなければならなかった。母親の病気は重かったために俺が住んでいた場所とは離れていた。母親は生死の境目をさまよった。俺と弟の陸斗はその間ずっとそばに居た。しばらくして母親の容態はよくなった。だがまたいつこんな状態になるかわからないと医者に言われた。俺はそれでその場所を離れられなかった。恋人と連絡を取りたくても圏外だった。しばらくして俺は住んでいたところへ戻った。その時恋人はそこには住んでいなかった。俺と恋人は離れ離れになった」

「だから・・・こんな組織に・・・」

「そうだ。俺はでっかいことをして有名になればきっと恋人が見つかると思った。それに組織にいれば母親の病気を治すための研究もできた。だから俺はこうしてここで戦っているんだ!!」

「・・・認めない・・・そんな方法は認めたくない!他にももっといい方法があるはずなんだ!」

「俺にはこれしかできなかった!行くぞ!」

海斗はその装置を使い自分の能力を上昇させた。

海斗は今までで一番大きな波を作り出した。

ロックマンは動けないオックス・ファイアの前に立ちその波を防いでいた。

しかし波の威力で自分が傷ついていた。

「仲間をかばうか・・・」

「お前にはキズナというものがあるはずだ!」

「俺にキズナだと?」

「そうだ!それを教えてやる!レッドガイアギャラクシー!」

ロックマンはブラックエースの作り出す空間に海斗を閉じ込めレッドジョーカーのビームを撃ち込んだ。

この攻撃により電波体のブラキオ・ウェーブはデリートされた。

### 第32話「愛と言う名の絆」

細嶋海斗はロックマンによって倒された。

「なぜだ・・・俺は負けるわけにはいかないというのに・・・」

ロックマンは電波変換を解いて言った。

「貴方は方法を間違えたんだ。だからうまくいかなかったんだ。もっといい方法を探すべきだったんだ」

「もっといい方法・・・か・・・そんなものが見つかると思うのか？」

海斗はその場に倒れたまま言った。

「きっとあるはずです。貴方の弟の陸斗先生だって多分働きながらその方法を探してるんでしょう。母親を助ける方法を・・・陸斗先生はきっといい方法を探して母親を助けて貴方を助けたいと思っていますよ」

「俺は・・・間違っていたんだ・・・これじゃ恋人も見つかるはずもない」

「きっと見つかりますよ。さっき言いましたよね。貴方にはキズナがあるんです。貴方と貴方の恋人との間に・・・愛と言うキズナが」

「愛と言うキズナか・・・ありがとう。星河スバル。俺はもう誤った道にはいかない。もっといい方法を探し出してみせる」

細嶋海斗はその後サテラポリスに自首しスバルとゴン太は組織のボスを探し始めるのだった。

そのころミソラは組織の女が入っていった森に来ていた。

「感じるわ・・・この森の中に何か居る」

ハープが言った。

「きっと組織のメンバーね。何をするきかわからないけど止めないとね」

ミソラはハープ・ノートに電波変換して進んだ。

「不思議な森・・・なんだか楽しいようなさびしいような」

「ここは記憶と現在が交わる森・・・」

「誰!？」

すると電波変換した組織の女が出てきた。

「私の名前はメモリー。今は電波変換してるわ」

「貴女の目的は何?なんでこんな組織に入ったの?」

「私は・・・変わっていく世界を過去の姿のままにとどめたいだけ」

よ。そのために新しくできたものなんかは破壊する。過去の美しい姿を汚すものはね」

「どうしてそんなに過去にこだわるの？」

「貴女にはわからない。私は孤独を味わってきた。孤独が嫌だった。私は両親が仕事で忙しくてほとんど会えなかった。家族の中でずっと1人だった……だけど私は寂しくなかった。あの日までは！！いくわよ！私は負けない！」

メモリーの電波変換した姿は植物のようで見た目から木属性であることがわかる。

「サウザンドリーフ！！」

彼女は葉を武器に変えてハーブ・ノートに飛ばした。

ハーブ・ノートはショックノートでそれらを弾いた。

「私もママが死んじゃってから孤独だった。一度は私も自分を見失った。だけど私を助けてくれたブラザーがいた！だから私は孤独じゃなかったのよ」

「貴女もそうなのね……私にもそんなブラザーのような存在が居たわ。だけど……もし貴女はそのブラザーがいなくなったら。自分がどうなるかわかる？」

「！？わたしは……私はブラザーが居なくなるなんてこと考えたこと無い……」

「そうよ・・・考えられない。だけど私はそうなった！だからこうしている！」

メモリーは再び攻撃を始めた。

しかしハーブ・ノートは反撃できなかった。

彼女には自分のブラザーが居なくなったらどうなるか分かっていたからだ。

彼女はのために敵に協力したこともあったのだから。

### 第33話「過ぎ去った記憶」

「どうして？・・・どうして貴女はそんな思いをしなくちゃならなかったの？」

「教えてあげるわ。あれは・・・」

それはまだ彼女が幼いころ。

もちろんまだウィザードというものは存在せず彼女にはそれが何なのかはわからなかったがそんなことはどうでもいいことだった。

それは1人で寂しくしていた彼女にできた友達だった。

ある日小さな森・・・といっても彼女の年齢からすれば小さいともいえない。

そこに植物のような姿をした電波体が居た。

「あなたは？」

二人は一緒に遊んでいるうちに仲良くなりいつしか心が通じ合うようになっていた。

電波体によって彼女の生活は寂しいものではなくなった。

毎日のように森に通い毎日のように森を駆け回り・・・そんな日々は永遠に続くようにも思われたほどだった。

しかし二人が出会ってから四年後

「ようやく見つけたぞ！こんな星にいるとはな！」

「だれ！！あなたたちは！」

「この星の少女か。まあほうっておけばいい。そいつを連れて行け！」

それは一瞬のできごとだった。

彼女の友達だった電波体は抵抗しようとして攻撃され瞬く間に連れて行かれた。

その一瞬のできごとは彼女の記憶に永遠に焼きつくことになる。

「これが私の記憶よ・・・私はこの記憶を忘れたくは無い。忘れればまた一人になってしまう。だから私は記憶を永遠にとどめておくために戦うの！」

「そんな過去が・・・だけど！記憶は過ぎ去ってしまうものだわ！いまさら戻ってくるものじゃない！」

二人は再び交戦した。

メモリーは植物の触手のようなもので攻撃しハープ・ノートも応戦した。

「貴女は記憶が過ぎ去ってしまうのが怖いのよ！だからこんなこと

をしている！」

「そうよ！その通りよ！！私はこうやって記憶をとどめておくのよ！」

「そんなことをしたって・・・貴女の記憶は変わらないわ！そんなことをして記憶をとどめることなんてできない！貴女は現実から逃げているだけよ！」

「うるさい！！私は記憶を持ち続けた！あの日・・・連れて行かれたウィザードのデータと共に！そして今私はそれをリバースマシンで復元させて電波変換を行った。これが私の記憶なんだ！！」

「そんなのは記憶じゃない！それはただのデータよ！貴女が心にとどめているのはつらい記憶だけ！そんなもので寂しさを逃れられると思うの？」

メモリーは一方的に攻撃しながら会話していた。

「仕方ないじゃない・・・現実はまだ過ぎ去ってしまった。だから記憶にすぎるしかない！それがいけないっていうの！？記憶をとどめてはいけないって言うの！？」

「そうじゃない・・・そうじゃないけど！！」

### 第34話「大切なものへの想い」

「記憶は忘れてはならないものだわ・・・私だって。ママのことは忘れたくない」

「そうでしょう！誰だって大切な記憶は失いたくない。それを守るために戦って何が悪い！！」

ハープ・ノートは黙ったままメモリーの攻撃を跳ね返し今度は自分から攻撃を仕掛けた。

「バトルカード！ワイドウェーブ！」

「リーフバリア！」

彼女はワイドウェーブを大きな葉で作り出したバリアで防いだ。

「サウザンドリーフ！」

「ショックノート！！」

その攻撃もぶつかり合い消滅した。

その後何度も攻撃をぶつけ合ったがどちらも同じパワーを持っているため打ち消されてしまう。

「どうして？・・・どうして攻撃が決まらないの？」

「それはお互いを守りたいもののために戦っているからよ」

「守りたいもの？・・・」

「そう・・・貴女は自分の記憶のために。私は大切な人のために！ただ貴女とわたしには違うものがある。だから私は負けない！！シヨックノート！！」

「サウザンドリーフ！！」

ハープ・ノートは大切な人への想いをのせてギターを弾き攻撃した。

一方のメモリーは過ぎ去ったもののために戦い攻撃をした。

ハープ・ノートの攻撃はメモリーの攻撃を打ち砕いて相手に向かって飛んでいった。

「何故！どうして！私の攻撃が負けたの！？私の記憶を守りたいという思いが相手よりも弱かったから？そんなはずは・・・」

その攻撃は直撃しメモリーの電波変換は解けた。

「貴女の思いは誰よりも強かったわ。だけど私の想いとは違ったところがある。それは貴女の思いは過去に過ぎ去ったものへの思い。貴女は記憶を守りたいと思うあまりに過去から前に進めなかったのよ。私のは大切な人のための想い。大切な人は私が落ち込んで現実が嫌になったときも励まして一緒に歩んでくれた。だから私は前に進むことができた。その違いよ・・・」

「やはり記憶は・・・持ち続けるべきではないの？つらい思い出も楽しかった思い出も・・・」

「記憶は忘れるべきではないわ。特に楽しかった思い出はね。つらい思い出は忘れたほうがいい。楽しい思い出を作ることによって忘れることができるわ。大事なものは記憶を振り返るあまり前が見えなくならないようにすること」

「私は過去を振り返りすぎたのね。現実を受け入れるべきだった。それができなかったから私はこんなデータのために戦った・・・これから本物の記憶。本物の大切なものを探すわ。きっとどこかでまた会えるはず」

ミソラは電波変換をといた。

「会えるわよ。もし私のブラザーが今ここにいたら・・・こんなことを言うと思うわ。貴女とその電波体は大切な思い出の中のキズナで結ばれている。だから離れていても決して別々じゃないってね。そう言うと思うわ。私の・・・一番大切な人なら・・・」

### 第35話「最後の戦いへ」

スバル達は組織のボス、アンビションを倒すためサテラポリス本部に集まっていた。

「あいつは来るんでしょうか？ 暁さん」

スバルが尋ねた。

「おそらく来るな。特に俺達4人がここに集まっている今こそあいつにとっては一気にこちらを潰す好機だと考えるかもしれないな」

そのシドウの予想は当たった。

アンビションは脱出した時の飛行機に乗りルナとキザマロを人質にやってきた。

「わが組織のメンバーを全員倒したようだな。だが今となってはやつらなど必要も無い。わが元にはこいつがあるのだ！」

アンビションはハンターVGから巨大な電波体を出現させた。

「あ・・・あれは!？」

「間違いねえ!! アンドロメダだ!!」

出現した電波体は変形した状態のアンドロメダだった。

「アンドロメダがどうしてここにいるの!？」

ハーブが驚いていった。

「不思議か？私はたまたま地球の大気圏上を漂っていたデータを回収しただけなのだがなあ？」

アンビションはアンドロメダに攻撃を始めさせた。

しかしシドウは前の戦いのダメージで戦える状態ではなかったため他の三人が応戦した。

「あいつを倒すにはコアが光っているときに攻撃すればいいんだ！バトルカード！マッドバルカン！！」

「ショックノート！」

「オックス・ファイア！」

それぞれの攻撃が光っているコアの部分にヒットする。

アンドロメダはそれでも怯まずにビームを放ち攻撃をしてくる。

だが身体が大きいため攻撃が当たらず逆に自分は攻撃を受け続けた。

「これではまずいな。もっと攻撃を激しくしろ！」

するとアンドロメダは狙いを定めずに所構わず攻撃をし始めた。

ロックマン達は攻撃をしようとするが乱れうちしている攻撃に当たってしまう。

「ロックマン！ハーブ・ノート！俺が敵の注意をひきつける！頼むぞ！」

オックス・ファイアはオックスタックルで敵に突っ込んだ。

敵は一瞬その攻撃に気をとられた。

「今だ！バトルカード！ヘビーキャノン！」

ロックマンとハーブ・ノートはその一瞬のすきに攻撃を連続で撃った。

「なに！？くそ！こうなれば！」

アンビションはスイッチのような物を取り出した。

「聞け！ロックマン！このスイッチは貴様の大切な友達を縛るロ―プに電流を流すことができる！貴様がおとなく倒されなければこの二人の命は無いぞ！」

アンビションはついにルナとキザマロの二人を人質に取った。

### 第36話「怒りのファイナライズ」

「ハハハ！これで攻撃できまいロックマン！」

「くっ！・・・」

ルナが言った。

「ロックマン様！私達はいいから攻撃して！」

「委員長！だけどそんなことをしたら」

「ロックマン様！！私は・・・いつもあなたの足手まといになってばかり！！もうそんなのは嫌なの！！」

キザマロも言った。

「僕だって！！敵に利用されるのは嫌ですよ！ブラザーのためなら怖くなんかありません！！」

「二人とも・・・わかった！いくぞ！アンビション！」

「何だと！？くそっ！やれ！アンドロメダ！！」

アンドロメダは拳でロックマンを潰そうとするが避けられた。

反対の拳で今度は付近にいたオックス・ファイアを攻撃した。

「ぐわっ！！ち・・・ちくしょう！」

オックス・ファイアはその衝撃で電波変換が解けてしまった。

「ゴン太！くっ！バトルカード！ムラマサブレード！」

ロックマンの攻撃はまたもアンドロメダのコアに直撃した。

だがその直後ビームがロックマン目掛けて発射された。

着地する寸前だったロックマンは無防備だった。

「スーパーバリア！」

その時ハープ・ノートがロックマンを庇って攻撃を受けた。

そのダメージでハープ・ノートも電波変換が解けた。

「な・・・なんだと・・・」

ミソラのこの行為にアンビションは何かショックを受けたようだった。

「ミソラちゃん！？僕のせいで！！くそっ！！！！バトルカード！ブレイクサーベル！！」

スバルは友を傷つけられた怒りで攻撃した。

その威力は怒りによって上昇しアンドロメダに大ダメージを与えた。

「ぐっ！！ならばこれでどうだ！」

アンビションはついに電流を流すスイッチを入れた。

ルナとキザマロを縛るロープに電流が流れる。

「委員長！！キザマロ！！うわああああ！！許さない！！許さない  
ぞアンビション！！僕のブラザーを！！」

ロックマンのノイズ率が急上昇した。

「ファイナライズ・ビースト！！！！」

ロックマンはファイナライズした。

その姿はグレイガとファルザーが混ざったような姿だった。

### 第37話「絆を信じていた者の過去」

ロックマンは怒りによってファイナライズした。

グレイガのパワーとファルザーのスピードが彼にそなわった。

「ばかな！ 電脳獣の力が一つになるだと！！」

ロックマンの怒りはビーストの力を増大させた。

ロックマンはそのスピードでルナとキザマロを縛るロープを切り裂き二人を助け出した。

「アンビション！！お前のやることを許すわけにはいかない！」

ロックマンはアンドロメダを鋭い爪で切り裂いた。

アンドロメダの身体はほとんど崩壊寸前になった。

「ばかな・・・何故他人のためにそんなに怒ることができる？ それが貴様のキズナということか？ わたしはキズナなどは認めん！」

アンビョンは語った・・・自分自身の過去を

彼は戦争を続ける国で育った。

彼には無二の親友がいた。

二人はキズナで結ばれていた。

心を通わせともにすごし・・・またともに戦場へと向かった。

「いくぞアンビション！！敵に突っ込むぞ！」

「無理だ！そんなことをすれば遠くから狙い撃ちにされるぞ！」

「俺を信じろ！大丈夫だ！危なくなったら俺がお前を守ってやる！お前は大切な友人だからな！」

彼は友人の言葉を信じて共に敵中に突っ込んだ。

その攻撃は成功し敵は撤退したように思われた。

「やったぞアンビション！俺達の連携が敵を追い払った！」

だがその時敵の増援が到着した。

銃弾がアンビションに向けて撃たれた。

しかし彼の友人は彼を庇ってそれを受けた。

「ぐっ！」

「おい！大丈夫か！？くそっ！俺なんかのために！」

「言っただろ・・・俺を信じろって・・・危なくなったらお前を守ってやるって・・・お前は俺の大切な友人だ・・・命をかけてでも守ってやる！」

その男は最後の力を振り絞り手榴弾を持って敵に突っ込んだ。

手榴弾が爆発すると同時に彼は自分と友人のキズナが崩壊したことを感じた。

「キズナを信じた・・・その結果わたしは友を失うことになった・・・だからわたしはキズナなどは信じない！！」

「違う・・・ぼくはキズナを信じ続ける！」

ロックマンはアンドロメダに向かって思い切り攻撃した。

アンドロメダはその攻撃によって崩れ去った。

### 第38話「最後まで信じられるもの」

アンドロメダが崩壊しロックマンはブラザーを傷つけられたことに  
対する怒りの力のファイナライズで勝利した。

だが・・・

「そんな・・・アンドロメダが再生してゆく・・・」

倒したはずのアンドロメダは再び元の形を取り戻してゆく。

「フフフ・・・わたしは友を失った後気づいたのだよ・・・キズナ  
など信じるべきではない・・・結局最後に信じるべきなのは己の力  
だということな！！力があればキズナなどを失うことも無い！！い  
や・・・そんなものを作る必要も無い！」

「だけど僕はキズナを信じているんだ・・・だけど・・・なんでア  
ンドロメダを倒せないんだ！」

その時誰かが答えた。

「怒りの力じゃだめなんだ。君にはもつとすばらしい力があるはず  
だ」

「今のは？・・・」

スバルのファイナライズ・ビーストは解けていた。

「わたしは力を信じた！キズナを信じたばかりにああいうことにな

ったのだ！それでも貴様がキズナを信じるといっているのであればわたしについてくるがいい！」

アンビションはアンドロメダをハンターV.Gに戻して去っていった。

「後を追わなきゃ！」

「ロックマン。俺は一緒には戦えねえけど絶対勝てよ！！」

ゴン太が言った。

「そうよロックマン様！私のロックマンさまが負けることなんて許さないんだから！」

「ロックマン！僕だって応援しています。だから絶対にあいつを倒してください！！」

最後にミソラが言った。

「ロックマン・・・私達は戦えないけど私達の心はずっとあなたのそばにいるわ！！」

「ありがとうみんな・・・僕は・・・絶対に勝つ！」

「ウォーロック。絶対に勝つのよ！」

ハープが言った。

「わかってるぜ！」

「がんばれよロックマン。ヒーローならブラザーとの約束は守らないとな?」

シドウはそう言って送り出した。

「ウォーロック。貴方に限ってはこんな心配は無いと思いますが・  
・負けないでください」

「なんだとアシッド!俺は絶対に負けるつもりなんかねえよ!ただ  
ど・・・ありがとよ。言ってくるぜ」

ロックマンはアンビションのいるところへたどり着いた。

「来たか。ロックマン。さあ雌雄を決するぞ!」

「キズナは絶対に力なんかにには負けない!」

「出でよ!アンドロメダ!ラ・ムー!」

アンビションは先ほどのアンドロメダと新たにラ・ムーを出現させた。

「ラ・ムーだつて!?!そんなものまで!」

「ハハハハ!!見せてやろう!究極の電波変換を!」

### 第39話「ダブル電波変換!!」

「究極の電波変換!？」

「そうだ・・・わたしは貴様らの知らない電波変換の方法を知っている」

そういつと彼はアンドロメダとラ・ムーを自分に近づけさせた。

「ダブル電波変換!!」

なんと彼の身体に対してアンドロメダとラ・ムーの2体が電波変換した。

その姿はアンドロメダとラ・ムーの面影を残しつつも巨人のようだった。

「これこそが究極の電波変換であるダブル電波変換だ!!」

「ばかな!??2体の電波体との電波変換だと!？」

「力と力が合わさってまた強大な力になる・・・でも僕のキズナ力はみんなの想いが合わさっているんだ!そんな力だけの電波変換には負けない!ロックバスター!」

バスターがロックマンの想いによって威力を増し敵を攻撃する。

「忌々しいやつめ!わたしの強大な力にそんなものは通じぬ!!」

彼はアンドロメダの巨大な拳でロックマンを潰そうとするが標的が小さいためなかなか当たらない。

「ちょこまかと逃げおつて。ならば!」

彼はラ・ムーの力を使い電波ウイルスを大量に発生させた。

ロックマンは一体ずつ攻撃して行くがアンビションの攻撃を回避するのに集中しているため中々数が減らない。

「多いな・・・これじゃいくらやっても減らないぜ・・・」

ロックマンも徐々に体力が減ってきていた。

その時。

「ブライブレイク!!!」

「ブ・・・ブライ!?」

ブライが現れ大半のウイルスをデリートした。

「どうして?」

「勘違いするな。いつも俺の行くところにお前がいるだけだ。やつはムーの電波体を利用した。だからやつと戦うだけだ」

「ブライ・・・アンビションは僕が倒す!それがみんなとの約束だ。君はウイルスを頼む!」

「勝手に決めるか・・・まあいいだろう。やつを倒してみろ。ロックマン」

ロックマンは再びアンビションに向かった。

「ロックマン！！貴様の攻撃など無意味だ！」

「僕はキズナのために攻撃するんだ！無意味なんかじゃない！バトルカード！エドギリブレード！！」

しかしその攻撃はラ・ムーのボディによって防がれた。

「スバル！もう一度ファイナライズだ！そうしないと勝てねえ！！」

「ダメだよ！ビーストの力じゃあいつは倒せない！！」

「言葉ではキズナだろうとなんだろうといえるわ！！だが力はそれでは示すことはできません！！」

アンビションの放つビームがロックマンに直撃した。

「うわああああ！！！！」

ロックマンはその場に膝を着いた。

## 第40話「絆のファイナライズ」

その時 ロックマンを送り出した彼のブラザー達はロックマンの危険を感じ取った。

「ロックマンが危険だな・・・」

シドウが言った。

「スバルのやつになんとか俺達の力を送ることができればなあ・・・」

「

「きっとできるはずよ！！私達はスバル君と大切なキズナで結ばれているんだもん！」

ミソラが言った。

ロックマンはなんとか立ち上がったがダメージによってほとんど動けない状態だった。

「くそお！！ここまでだったのか！あんな電波変換に！！」

彼のブラザー達は声に出して祈った。

ブラザーの勝利を・・・ブラザーが約束を果たして帰ってくることを。

「スバル君！！絶対に勝って帰ってきてください！！僕はスバル君みたいなブラザーを持って誇りに思っているんです！何のとりえもないけどスバル君みたいな人がいるからがんばろうって思え

るんです！ぼくのブラザーとしての力を受け取ってください！」  
キザマロが言った。

「スバル！！俺はうまい牛丼を食うときお前と一緒にだともつとうまいんだ！！ブラザーと一緒にいるってのはそういうことだろ！！俺は離れていたっていつでも一緒だ！がんばれスバル！！俺の想いを受け取ってくれ！！」

ゴン太が言った。

「スバル君！！お願い！絶対に勝って！！私はあなたにいつも元気をもらっている！だから・・・ブラザーとして私だってあなたの力になりたい！この想い・・・大切な人・・・スバル君に届いて！！」  
ミソラが言った。

「スバル君！！約束を守らないとしょうもないんだから！！私達はブラザーのためならどんなことだってできる！！あなたを信じているわ！！だから私達の力を受け取って！私達のキズナの力を！！」  
ルナが言った。

「みんながお前のことを応援しているぞ。みんなとの約束を守らないと大切なキズナは守れないぞ？ロックマン。俺だってお前を信じている。お前は決してそれを裏切らないはずだ」  
シドウが言った。

皆の祈った想いは光となりロックマンのところへ向かっていった。

「みんなが応援してくれている・・・みんなが僕を信じてくれてるんだ！！」

「キズナを信じたからわたしはこうなったのだ！信じるなど無意味だ！！」

アンビションはビームを放った・・・だがそのビームは想いの光が作り出したバリアにより跳ね返されビームはラ・ムーのボディを崩した。

ブラザー達の想いはスバルの身体の中に入っていた。

「みんなの想いが僕に力を与えてくれる・・・ファイナライズ！！」

ロックマンがファイナライズした姿はブラックエースとレッドジョーカーが合わさったような姿だったが少し違う部分があり何か別の力が感じられた。

「ファイナライズにグレイガとファルザーの力が加わったのか！？」

「違う・・・これはビーストの力じゃない！！これは僕達のキズナを形にしたものだ！僕達は今一緒に戦っているんだ！いくぞ！これがキズナの力だ！！」

ロックマンはキズナの力を集結させ思い切り敵に突っ込んだ。

「ブラザーバンドガイアギヤラクシー！！！！」

キズナの眩い光が敵の視界をさえぎりブラックエースのソードは想いによって巨大化しそのビームのような速さで敵に一太刀を食らわせた。

「うおおおお！！！！ばかなあ！！絶対的な力がキズナに負けるだ  
と！！！？？」

「キズナを信じる力が勝ったんだ！！ブラザーとの約束を守るため  
に！！」

アンドロメダとラ・ムーのデータはばらばらになり消えていった。

## エピソード「ビーストの力とそれぞれのその後」

ロックマンはリバイバルのボスに勝利した。

「何故・・・何故負けたのだ？わたしはキズナを信じたために友を失った。だが貴様はキズナを信じて強大な力を打ち破った・・・」

「あなたの友人はあなたとの約束を守るためあなたを守ったんだ。もしあなたと友人のキズナがなければあなたの友人はあなたを守ることはできなかった」

「わたしは・・・キズナに守られたというのか？」

「そう・・・キズナを信じることによって得られる力はどんなものにも勝るかけがえの無いものなんだ」

「・・・私はキズナを最後まで信じることはできなかったのだな・・・」

その時ロックマンの身体の中に再び謎の電波体が入った。

そしてその電波体が出て行くと同時に彼はビーストの力が自分の身体から出て行くのを感じた。

「君にはもうこの力は必要ないね。何故なら君はもつとすばらしいキズナの力を手に入れたのだから・・・」  
電波体はそう言って消えた。

その後サテラポリスによってすべての暴走ウィザードがデリートさ

れ地球に平和が戻った。

スバルは約束を果たしブラザー達のところへ戻った。

そして今では・・・

アンビションはキズナを信じるということ思い出した。

細嶋海斗は離れ離れになっていた恋人を探し出し二人で彼の母親を助けるための研究をしている。

メモリーはあのかの電波体を探すため旅に出ている。

ローヤルは自分の意志を持ってやりたいことを探している。

ロンリネスの行方はわかっていない。

誰も居ないスバルの部屋に置かれたハンターV.Gにメールが届いていた。

宇宙では今F.M星に危機が迫っていた。

しかしそんなことも地球にはわからなかった。

地球はまたロックマンの活躍によって平和になった。

終わり

## エピソード「ビーストの力とそれぞれのその後」(後書き)

ついに書き終わりました。

結構つかれましたがとりあえず次回作として宇宙での戦いを書く予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5044h/>

---

流星のロックマン Enemies return

2010年10月11日18時18分発行